

懺悔 zange

挿絵 / 河川敷

魔法少女 と



呼ばないで

後編

Presented by まほよば



本作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体とは一切関係ありません。

また本作品を無断で複製、配布、転載、配信することを禁止します。

※本作品は見開き表示がデフォルトで設定されていますが、左右のページが逆で表示される場合は、左記の設定変更をお試しく下さい。

「編集」↓「環境設定」↓「言語（もしくは言語環境）」↓「デフォルトの読み上げ方向」↓「右から左へ」を選択

目次

・ 3 p ｝	第七話	「ルリとカズキと、時々童貞」
・ 1 3 0 p ｝	第八話	「あなたの為の、桃色ワンピース」
・ 2 3 9 p ｝	第九話	「彼が望む二人の幸せ」
・ 3 3 3 p ｝	第十話	「ユーキ君！ 調子に乗らないで！」
・ 4 4 9 p ｝	最終話	「だからもう……」
・ 6 0 4 p ｝	おまけ短編その1	「シャーリー危機一髪」
・ 6 5 4 p ｝	おまけ短編その2	「魔法人妻の潜入捜査 後編」
・ 6 8 7 p ｝	おまけ短編その3	「タクヤ君のどきどき初体験？」

第七話 「ルリとカズキと、時々童貞」

遠藤カズキは今日も朝からルリが入院している病室の前のソファに座り文庫本を読んでいた。彼はルリが入院して以来、時間が許す限りそんな行動を日課として続けていた。ルリは意外と寂しがり屋だから、目を覚ました時には誰かが傍に居てやらないと心細く思うに違いない。あくまで前向きに、彼は恋人の意識が戻るのを待ち続けていた。

俺とルリが初めて出会ったのはまだ俺が幼稚園の頃だった。そんな時分だったものだから周りの状況までは事細やかに憶えてはいない。両親と学生時代から親交が深かった夫婦に子供が出来たからと、ほぼ強引に病院に連れていかれたことだけは憶えている。別に行きたくなかったけれど帰りに玩具を買ってくれるからと、そんな理由で釣られて同行しただけのこと。ルリはその時赤ちゃんだった。「力

ズキも、これでお兄ちゃんだな」と父親に頭を撫でられながらも、「猿みたいだな。それより何の玩具買ってもらおうかな」なんて思っていたっけ。今ルリにそんな事を言ったらどうなることやら。それにしてもにあんなちんちくりんが、まさか誰もが羨む麗しの恋人になるなんて思いもよらなかった。

頭を掴まれて放り出されるように病室から追い出された俺は、チエちゃんに同情を誘うような目で訴えかける。

「なんか最近アカリちゃんのDV激しくなってる？」

「DVのDはドメスティック。つまり家庭内っすね。ユーキ先輩には当てはまらないっす」

「じゃあこれは何なのさ」

頭をさすりながら尋ねる。

「正義の鉄槌っす」

「俺悪なの？」

「人の恋路を邪魔しちや駄目ですよ」

「チエちゃんも赤飯のおにぎりとか渡してたじゃん」

「あれは心の底からのお祝いですもん」

チエちゃんは胸を張ってそう言うと、追い出された病室をうつとりと眺める。

「あーあ。今頃またいちやいちやしてんのかね」

「お二人はあたし的に最高の夫婦です」

「まあ二人に子供が出来たらすごい武者になるだろうな。……なんか俺、その子供にまで殴られそう」

「でも楽しそうですね」

「そりやね。親友として応援しないわけにはいかないでしょうよ」

「あたしも弟子として同じ気持ちです。でも元々そんなの必要なかったんでしょけど。だって師匠もアカリ先輩も運命って感じで結びついてますもん。他の誰もついている隙なんてこれっぽっちも無さそうです」

「確かになあ」

頬をかきながら微妙な表情を浮かべる。

「それじゃあたし、これから部活なんで失礼します！」

「ああ、頑張ってたな」

「はい！」

チエちゃんは勢い良く一礼すると小走りで去っていった。

「あの子も普通にしていりゃあもっとモテるのになあ」

そう一人ごちる俺の背中へと不意に声が掛かった。

「いやいや。あの子は今のままで十分だよ」

「うわっ、びっくりした」

慌てて振り返ると立っていたのは七雄さんだった。

「よう。サトシの見舞いの帰り？」

「あ、はい。七雄さんですか？」

「まあなあ」

「どうせチエちゃん目当てだったんでしょ？」

「そうそう。一足遅かったみたいだけど。そういや、ついにサトシ

脱童貞だって？」

「ああ聞きました？ いやあ感慨深いですよ」

「ユーキも頑張らねーとな」

「あはは…：なかなか前途多難ですねぇ」

「狙ってる女とかいねーの？」

「んー、どうでしょう」

「なんだよ煮え切らねーな。でもあれだな。親友が童貞捨てたつてのにユーキだけ彼女も居ないの可哀想だな。よし、俺が色々プレゼントしてやんよ！」

「え？ マジっすか。AVとかっすか？」

「バツカ。もっと良いもんやるよ。これから暇か？ ウチ来いよ」

「全然OKっす」

「あ、悪い。今すぐは無理だったわ」

「またセフレっすか？」

「ああ、セフレっつうか、便所っつうか…：でも夜には帰すからさ。

また連絡するわ」

「わかりました」

なんたる良いものって。わくわくするな。実際のところサトシにだけ童貞捨てられてちよっと焦ってんだよなあ。

小さいころからルリの家には親に連れられてよく遊びに行ってた。ルリの両親はどちらも優しく、特におばさんはルりに似て滅茶苦茶綺麗なんだよな。焼いてくれるケーキが美味しくて遊びに行くのが楽しみだった

物心が着く前からルリは俺の後をひよこひよこ歩いていたのを憶えている。言ったら怖いから絶対秘密だけど、あいつのおしめ替えてたこともあった。言葉を覚えると、お兄ちゃん、お兄ちゃん、と嬉しそうにくつついてきた。俺も弟か妹が欲しかったから仲良く遊んでいた。絵本を読んであげたり、お馬さんごっこに付き合ったり。家も近かったしあの頃は毎日のようにルリと遊んでいたよ

うな気がする。それで夕飯の時間になって帰ろうとすると、帰っちゃやだあ、って泣くんだ。結構泣き虫なのは今でも変わらない。いつもは偉そうにふんぞり返ってるのにデートの帰り際になると、急にしおらしくなって黙って袖掴んでくる。「何？」って聞くと唇尖らせてずっと黙り込む。そんな自慢の彼女。

夕日がそろそろ水平線の彼方へと消え落ちていこうする時間。

『女帰したからさ、暇なら今から遊びに来いよ』と七雄さんからメール。

えーっと。添付されてた地図によるとこの辺だよな。七雄さんのマンション。あ、もしかしてあの馬鹿でかいやつか？ あのマンション有名だよな。街のど真ん中だし。どんなセレブが住んでんだよって皆が羨望の眼差しを向けてたけど七雄さんすげえな。マジで金持ちの息子かよ。人生勝ち組だなあ。

ん？ あの如何にも頑固そうに揺れるポニーテールはアカリちゃんじゃん。こんなとこで何してんだろ。

「おい！ アカリちゃん！」

彼女はびくりと肩を震わせるとおそろおそろ振り返った。俺の姿を確認すると大袈裟なほど肩を落とした。

「なんだよ不審者見るみたいに。失礼な」

彼女ははあ、と安心するように息を吐いた。

「ユーキ君のシルエツトは不審者そのものなの」

「ひど。買い物かなんか？」

「まあそんな感じ。ユーキ君は？」

「今から七雄さん家に遊びに行くんだ。アカリちゃんも行く？」

「冗談やめてよ」

「あれ？ 七雄さん苦手？」

「あつたり前でしょあんなの！」

如何にも不機嫌そうな剣幕でそう吐き捨てる。

いやまあわかってたけど。病室でも露骨に避けてるし。でもそ

んな声張り上げて怒んなくても。

「ほら、あのでかいマンションなんだって。すごいよな」

「別に。興味ない。じゃね」

「ほーい。また今度」

アカリちゃんと別れるとそのまま通りに沿って歩いてマンションに向かう。目前に迫るとその図体の大きさに改めて驚かされる。うーん。庶民にはなんだか気後れするなあ。腰が引けながらもエントランスの呼び鈴を押すと、「おお。入って来いよ」と気軽に迎え入れてくれた。

エレベーターで最上階に向かう。廊下から見下ろす街は絶景だった。

「うわあ、本当高いなあ」

感嘆の息を漏らしながら七雄さんの部屋の呼び鈴を押す。彼はすぐ顔を出した。

「よ」

「ども。お邪魔しまーす……ってやっぱり中も滅茶苦茶広いっすね」

「あー、一応同居人居るからな。今はいねーから気兼ねすんなよ」

「なんか、甘い匂いしますね」

「ああ、さっきまでセフレとやりまくってたからな」

「リビングでやってたんすか？」

ていうかやった後ってこんな匂いするんだ。なんか頭の芯に直接訴えかけてくるようにクラクラする生々しい匂い。これがセックスしてた後の匂いってやつなのか。フェロモン、ってやつ？

「立ちバツクしながら歩き回ったりさ、するじゃん？」

「じゃん？ って言われてもわかかんねーっす」

そう笑いながらも腰を下ろしたソファの脇にあるものを見つける。それを拾い上げた。

「これアナルパールってやつじゃないですか」

半透明の紫色のピンポン球が連なっている棒状の物。手に持つと鞭のようにしなびれた。

「ああそれ、そんなと落ちてたんだ。駅弁しながらケツに挿してたんだけど、いつの間にか無くなってたんだよな」

「はあ」

なんだかもはやイメージすら沸かない。童貞には遠いおとぎ話のような世界だ。

「まあそんな事はどうでもいいや。本題本題。今日集まってもらったのは他でもない」

「俺しかいませんけど」

「細かいことは気にすんな。一人寂しく童貞として取り残されたユーキに、こいつをプレゼントしてやろう」

七雄さんは大袈裟に身振り手振りを交えながら一枚のDVDをデツキに入れた。

あれはルリが幼稚園に入ったころだったかな。

「ルリ、カズキお兄ちゃんと結婚するー」

近所の公園の砂場で遊んでいると突然そんな事を言われた。ルリ

のお父さんががっくりしながらも、「まあ、カズキ君だったらいいかー」と笑っていたのを憶えている。俺は小学校三年生くらいだったから、流石にちよっと恥ずかしかつたんだ。でも素直に嬉しかった。

「ありがとなー」って言って頭撫でてやると、「えへへー、カズキお兄ちゃん、大好きー」って無邪気に笑ってた。

それからルリが小学校に入ると少し疎遠になったんだっけ。でも家は近いから、たまに顔を合わせて言葉を交わすくらいくらいの仲ではあった。初めてルリを女性として意識し始めたのは、ルリが中学生に上がったくらいだったかな。その頃にはもうルリの可憐さは際立っていた。いわゆる学校のマドンナ程度では、ルリの隣に立つと凡百の女学生にしかならなかった。幼稚園や小学校の運動会では、他の子供の親もルリを率先して撮っていたとも聞く。そこまで目立てば苛めの一つもありそうなものだが、ルリのそんな事を鼻にもかけない性格や（というか、正直がさつなだけなのだが）、そもそも嫉妬すら馬鹿馬鹿しくなるほどの差を見せ付けられれば、

やっかむ気にすらならないものらしい。

これは後でルリの同級生に聞いた話だけど、ルリは昔からずっとある年上の人が好きで（当然俺のことだ）、それを周りにも公言していたから、女子も目当ての男子を取られる心配が無かった、という事も大きかったらしい。

そんなルリが一体俺のどこを好きになったのかはわからない。時折見かけるルリは日に日に美しくなっていく、こんな地方都市の住宅街にはとてもミスマツチな存在になっていた。

付き合うきっかけになったのは去年の夏祭りだ。

ある日突然向こうから誘ってきた。特に断る理由も無かったし、散歩程度の軽い気持ちで二人で出かけた。ルリが俺に対して特別な感情を抱いているなんて、これっぽっちも思っていなかったからだ。しかし今思えばすごく気合が入っていた。どこか挙動がぎこちなかったのは着慣れない浴衣のせいかと思っていたけど、緊張していたのかもしれない。

河川敷に大きな花火が舞った瞬間、「ずっと、好きだったんだけ

ど」と、隣でか細い声が聞こえた。つい「は？」と聞き返すと、ルリはぐ、と唇をかみ締めて、眉間に皺を寄せると、俺の耳たぶを引っ張って、「ずっと好きだった！　　て言ってんの！」と鼓膜を破らんとばかりに叫んだ。そしてきよんとする俺を、泣きそうな顔で睨み上げながら、「っ、っつ、っつ、付き合ってよ！！　責任、取ってよね！」とまるで親の敵を見るかのような形相で交際を申し込んできた。後でルリ本人から聞いた話によると、結婚の約束はずっと有効のままだったのに、いまだにデートすら誘ってきてくれない俺にやきもきしていたとのこと。

正直その時は何が起こったのかよくわからなかったけど、そのあまりに必死な視線に頷くことしか出来なかった。同時に特大の花火が夏の夜空を覆ったのを憶えている。照れ隠しなのか、「……まったく」と呟きながら口を尖らせて前を向いたルリの大きな瞳には、色とりどりの火花が映りこんでいた。

モニターは男にバックから突かれています。臀部と背中、そして陰茎の抜き差しをスムーズに行う肉壺を鮮明に映し出す。

『はあ……はあ……はあ……はあ……あ、っん……くっ、あ』

おおお。俺の目はモニターに釘付けになる。ハメ撮りってやつですか。

「これ、この前写真貰った子ですよね？」

「そう。ルリちゃんっていうの。マジ美人だろ？」

「ていうか、やっぱ身体もすごいですね。なんていうかこう……：そ
そられます」

「いちいち肉付き良いだろ？ こいつユーキ達とタメだぜ？」

『んっ、ああ、はあ、はあ……い、いきそう……♡』

うっすら汗ばんでいるその背中だけで生唾を誘う。均整が取れつつも柔らかそうな女性特有の丸みが顕著な身体つき。画面越しにでも理性を奪われそうな肉体。

『あっ♡ あっ♡ あっ♡ いくっ！ いくっ、いくいくいくっ！

「いっちゃうっ！！！」

「これも勝手に撮っちゃったんですか？」

「バレてもいいやって思って撮ってたんだけど、思ったよりセック
スに没頭してて気づかれなかった」

「なんかお尻から白いの漏れてきたんですけど」

「この直前にアナル中出しきめてるからな」

「流石っすね」

『ああすごい！ それ、やばい……って！ あんまり奥されると、
頭に、響く……あああっ！！！』

「でもルリとはこれが最後になっちゃってるんだよなあ。まあ、目
標は達成したからいいけど」

「目標？」

「俺の美学の話さ」

「はあ」

色々と住む世界が違う人はようわからん。

『ああ、んっ………やだ、気持ち良い……』

うっとりするような声をあげながら、ルリちゃんとやらのおまんこの入り口がまるで生き物みたいに、根元まで埋まった七雄さんのちんこをきゆうきゆう締め付けているのを煎餅を齧りながら見る。

それからはトントン拍子、というわけでもなかった。といっても二人の間に障害なんてものは何も無かったけど。ただずっと兄と妹みたいな関係だったから、いきなり彼氏彼女って言われても難しいものがある。ルリは鼻根目抜きにもそこら辺のアイドルじゃ太刀打ち出来ないような絶世の美女だ。だが俺にとっては鼻水を垂らして、後ろをひよこひよこ付いて来る妹でもあった。なので付き合っても仲良く手を繋いでお買い物、なんて健全なデートばかり。それはそれで楽しかったし、俺を羨む男の視線で優越感に浸っていたりもした。

まあとにかく、そんな甘酸っぱい関係がしばらく続いてた。それ

が大きく変わったのは去年の夏くらい。キスくらいはしてたけどそれ以上となると中々上手くいかなかった。勿論俺から何度か誘ったことはあるけど、「結婚するまではヤダ」と返されるばかり。どうも処女を奪うなら結婚しろ、ということらしい。今時の女子校生らしくやや粗暴とも言えるざつくばらんな言動が目立つルリだけど、恋愛に関しては不器用というか、良く言えば清纯だった。

そんなルリがある日突然、「Hしても、いいよ」と告げてきた。その瞳にはどこか決意というよりは、悲哀がこもっていたような気がする。ルリは出血さえしなかったものの、初めてらしく、ずっと耐え忍ぶような顔で俺に抱かれた。ただ苦痛に顔を歪めている、というわけでも無かった気がする。それから俺達は普遍的な若者らしく頻繁に身体を重ねた。むしろルリから求めてくることが多いくらいだ。しかしそれなのに、ルリからはセックスを楽しんでいる気が全く無い。いわゆるマグロとは違った。時折甘い吐息が漏れるものの、歯を食いしばり、目を固く閉じて、まるで俺が射精するまで何か強く堪えている様子。

なのに射精が終わると途端に甘えてくる。ルリにとっては、セックスは後戯の時間が本番らしい。終わってから裸でいちゃつくのが好きなんだそうだ。

「本当は始めからそうしていたけれど、それだとカズキが我慢できないんでしょ？」と不満そうに唇を尖らせていた。

確かにそれでは蛇の生殺しすぎる。それならそれでフェラくらいしてほしいけど、そんな事頼んでもしてくるはずもない。エッチ中は本当にただ恥ずかしがってばかりだし。体位だって正常位しかやらせてくれない。その見た目や言動とのギャップはとても愛らしけれど、もう少し大胆になってほしいとも思う。

『あんっ！ あんっ！ あんっ！ ああっ、だめっ！』

画面の中ではパンパンパンと肉と肉がぶつかると生々しい音がリスミカルに響き続けていた。七雄さんの腰がそのむっちりとしたお尻

に叩きつけられる度に、湿った音と乾いた音が同時に鳴る。画面の中の美少女は未だに動画を撮られていることなど全く気づいていないように激しく淫らかな声を上げていた。

『ああ、すごい！ このちんぽ、だめ！ ルリのおまんこ、このちんぽで、駄目になっちゃうんだってば♥』

「俺が言うのもなんですけど、今時の女子校生はけしからんっすね」
「まあ特殊な事情があるしなあ」

そう苦笑いを浮かべると、「それに特にルリは割り切ってるよこあったからなあ。自分からイケイケノリノリになって、結果コントロールするっていうか。ほら、自転車でもスピード出した方がバランス取りやすいじゃん？」と言葉を続けた。

「はあ」

なんの話がわからんが、とりあえず相槌だけしておく。

『いいっ！ いいっ！ ああっ、あっあっあっ！ ……はっ、はあっ、あああん！』

「今もう一人セフレ居るんだけど、そっちは割り切ってるつもりな

んだらうけど、無意識に罪悪感でブレーキ掛けようとすることからややこしいんだよなあ。ルリみたいに素直にセックスはセックスとして楽しめばいいのによ」

「そういうもんすか」

『出すぞ？』

『きてっ、きてっ！ あああああ、もう無理っ、出してえっ！！！』

モニタの中では二人はクライマックス。手ぶらや微妙に粗い画質が妙に生々しい。二人の熱気が画面から漂ってきそうさ。しかしセックスの経験も無い俺にはどこか希薄。興奮はするが所詮他人事といった感じ。あの肉はどんな感触なんだろうな。いいなあ、俺も触りたいな。サトシが羨ましい。

アカリちゃん可愛いし、俺の見立てではスタイルも良いんだよなあ。アカリちゃんもこんな風に乱れるのかなあ？ いやそんなわけないよな。普段の感じ通りきつとマグロなんだろうな。でもあの子マジでサトシラブだからな、時折恥ずかしそうに「やん」なんてくらの吐息くらいは漏らしたりして。なんて本人に知られたら間違いな

く肋骨の一本でも覚悟しないとイケない不埒なことを考えながら、びくびくと射精する七雄さんのちんこを啜るルリちゃんのおまんこを眺める。

他人のちんこ見ながらこんな事考えるのもあれだけど、本気持ち良さそうだなあ。そんな俺の羨望を感じ取ったのか、「ルリは特に肉厚って感じ。油断すると押し返されそうなぐらい」と七雄さんが片手をひらひらさせながら言った。そんな事を言われても想像だにできない。

ずるりとまだ硬さを完全には失っていないちんこが出ると、童貞の俺でもわかるくらいに新品同様のまんこがひくひくと蠢き、そしてどろりと精液が垂れ落ちて来た。二つの穴同時から精液が垂れている様子は、ピュアな俺にはもはや現実感がわからないほど卑猥だ。携帯で撮っていたであろう画面が大きく揺れる。七雄さんとルリちゃんを横から映し出した。ベッド脇にでも置いたのだろう。お尻を突き出したままのルリちゃんの横顔が写る。なんて切なそうな表情。この子のことを何も知らない。普段の顔を知らない。それでも

彼女がこの時、心底弛緩しきっているのがわかる。

『おい』

七雄さんがただ一言冷たい声色でそう口になると、ルリちゃんは蕩けた顔から微かに顔を歪めて舌打ちをした。反抗的な表情とは裏腹に彼女は四つん這いのまま、億劫そうに身体を反転させると、ベツドの上で胡坐をかく七雄さんの腰に顔を埋めていく。

「これが伝説のお掃除フェラっすか。もはや俺にはどんな感触か想像すら出来ないっすよ」

「くすぐりたいと気持ち良いが半々かな」

アカリちゃんもサトシにこんなのかね。結構ああ見えて尽くします。みたいな感じだもんな。いやでも、やっぱりしないだろう。あの子は。性的なことに対して嫌悪感っていつていいくらい厳格な気がする。子作り以外のセックスはしたくありません！ みたいな。

ルリちゃんは丁寧に七雄さんのちんこに舌を這わせていく。かと思えば亀頭を啜え、頬を凹ませて、ずずず、と音を鳴らして吸った。

その頭を七雄さんがそつと撫でる。

「憶えとけよ。フェラ中は優しく頭を撫でてやるんだ」

将来役に立つかどうかもわからない助言を記憶に刻む。でも確かにルリちゃんの奉仕も熱が籠り始めたように見える。彼女の中で七雄さんが再び硬さを取り戻したのだろうか。ちゅばちゅば、と水音を立ててフェラをします。そして七雄さんが黙ってルリちゃんに背を向けて、そしてお尻を突き出すように四つん這いになると、彼女はなんの躊躇もなく顔を近づけ、そしてアナルを舐め始めた。おおすげえエロい。本当に俺と同じ年かと疑いたくなる。同級生達も皆こんなことやってんだろうか。何か悔しい。

しかしこの子本当に綺麗だな。そんな子が犬みたいに舌を大きく出してペロペロとアナル舐めてる姿はやけに現実味の無い光景だ。

『もっかいしようぜ？』

画面の中の七雄さんがそう言うと、面倒くさそうに顔をしかめて、『……ええ』と声を漏らす。しかし左手の指は目の前でぶら下がる玉を下から摩るように撫で、そして右手の指の腹は先程まで丁寧

舐めていた七雄さんのアナルをやはり摩るように撫でていた。溜息交じりに『うざ』と呟くと、一瞬の逡巡のすえ唇を尖らせて、アナルへくちづけすると、ちゆうう、と音を立てて吸った。そしてそのまま、『あくあ……だる』とやはり鬱陶しそうに声を上げながらも、正常位で受け入れるように背中からベッドに倒れる。その際に自分の表情を七雄さんから隠すように枕を顔の上に乗せていたが、横から撮られていたため、その微かににやついた表情が確認できた。

七雄さんがまだ熱気を失っていない彼女の身体に押し掛かろうとすると、その口元はさらに期待するように持ち上がった。ちんこを腰に押し当てられる。その瞬間、『ああ、ん……♥』と甘い吐息を漏らすと、一瞬でとろりと表情に溶けさせて、ペろりと唇を舐めていた。真横からの映像だったからわからなかったけど、七雄さんはアナルのほうへちんこを押し当てていたらしい。

『……また、そっち？』とルリちゃんが不満そうに呟く。

しかし枕の下の表情は、やはりどこか楽しげに緩んでいた。

『どっちが良いんだよ？』

挑発するような意地悪な物言い。

『そっちでも……いいけどさ……』

一気に突き入れる。

『はっ！ あっ！ ……ああ………：…：…：…：…：…：…』

『良いだろ？』

少し苦しそうにコクコクと頷く。

『ほら、こういう時、どうやって言えばいいかわかんだろ？』

ルリちゃんは異物が排泄器官に侵入してきた感触に、

『はっ、はっ、はっ、はっ』と小さく、そして浅く息を吐き続けている。

ラマーズ法みたい。

『ほら』

返答を急かすように、一度ぐい、と腰を動かす。

『あっ、ひ♥』

そのままゆっくりと、腰を前後させ始める。

『ひっ、いっ、いっ、あっ、ああっ、ああんっ♥』

そして中断。

『うっ、あっ……んっ……っく……うう』

背中から首を仰げ反らせて苦しそうに呻く。それでも枕を握り締める両手は、表情を見られてたまるか！ という意志が伝わってくる。しかし七雄さんは腰を動かさない。ルリちゃんは堪らないといった様子で、自ら腰を押し付けるように動く。そして覚悟を決めたようでごくりと喉を鳴らすと、『ルリのお尻……めちやくちやにして……』とか細い声で懇願した。七雄さんは無反応。ルリちゃんはお枕の下で、ぎり、と音が聞こえてきそうな程歯を食いしばった。おそらく眉間に皺も寄っている。それほどの苛立ちが画面から伝わってくる。しかし自分の腸内に入っている肉棒の感覚はそれほど甘いのか、『んっ、くう♥』と切なそうに声を上げる。そして、『糞野郎！ 後で憶えてる！ 絶対セーブ消してやるからな！』と吐き捨てるように叫ぶと、打って変わって弱々しい声で、『………ルリのアナル、めちやくちやに犯して下さい』と呟いた。七雄さんはお気に入りの生徒を称えるように優しくに微笑えんでルリちゃんのお

頭を撫でる。

「いやこいつは出来の良いオンナだよ本当に」

隣でそう満足げに頷きながら呟いていた。

「……でもマジでセーブ消されるとは思わなかったわ……せつかくキラーマシン仲間にしたところなのに……」と落ち込んでもいた。よくわからん。

画面ではルリちゃんがガンガンにアナルを掘られていた。

『あいつ！　　いっ！　　ひいっ！　　あっあっあっ！　　あああっ！』

口元からは涎が垂れていた。

「そんなアナルっていいんすかね？」

「知らん。掘られたことないからな。でも俺は『女は基本的にはM説』を唱えているからな。被征服欲とかあるんじゃないかって研究を続けている」

腕組みをしながら難しい顔でそう口にする。

「まんことは違う感じですか？」

「入り口がとにかくきつい。ちんこ千切られそうになる。中の感触

は単調かな。まあその辺はやられてる側と一緒に背徳感で興奮みたいな？」

「へー」

『お尻、おちんぽで広がっていいっ♥　すごっ♥　あっ、いいっ！
ああっ♥』

『ああイキそう。な？　またこっちで良いよな？』

ルリちゃんは枕を押し当てながら、もう何も考えられないといった様子でコクコクと頷いていた。隣で七雄さんが「竹、完遂」と感慨深そうに指で眉間を押さえている。画面では七雄さんが正常位でアナル中出しをきめていた。

『…：…：やっ♥　…：…：あつつう…：…：はっ、はあ、んっ、はあはあ、あつつ…：…：』

腸内で射精される度に、だらしなく開いたルリちゃんの口からはそんな声が漏れる。そしてぐっ、と辛そうに歯噛みすると、『…：…：カズキ…：…：ごめんね…：ごめんね』と呟いたその直後、まだ自身の奥で続いていた射精に、『はっ、やあっ、ん…：…：熱い…：…：ああ、す

「……♥』と悩ましげに身体を振じらせる。

「カズキ？」

「この子の彼氏」

「えええ！ 鬼畜じゃないっすか。ていうかこの子も駄目でしょ」

「色々事情があるんだよ」

「いやいやいや。どんな事情あっても駄目っしょ」

「この子はな、彼氏を守るために魔法少女として戦ってるの。それで魔力を補給するために仕方なくこういう事してんだよ」

いつものしょうもない冗談に気が抜ける。

「……ああそうですか」

「なんだよ？ 面白いだろ？」

「はいはい」

「ところでユーキ君よ、なんだか一人つきりにしてほしそうな顔をしているじゃないか」

「いやいやそんな」

「うはは。身体は正直だのお」

そう笑いながら股間に手を伸ばしてくる。

「……つておお、結構デカイんじゃないかね？」

「いやあ無用の長物ですよ」

「なんだよそんな立派なもん遊ばせておきなよな」

「相手居ないんだからしょうがないでしょ」

「ま、とりあえず俺ちよつとコンビニ行つて来るから、一人で楽しんでてくれよ」

愉快気に俺の肩を叩きながら腰を上げる。正直その気遣いは有り難かった。こんなもの見せられたら童貞としては堪らない。

「あ、そつちの棚にも色々あるから。人妻とか妊婦ものもあるぜ」

「マジっすか？ マジで鬼畜ですね」

「いやあ、世界の平和を守るためだからさあ。魔法使いの辛いところだなあ」

「その設定引つ張りますね」

「じゃあちよつと席外すから。あ、ファブリースとティッシュそこな？ 帰ってくるまでに色々済ましとけよ」

「了解っす」

片手を上げてひらひら振りながら七雄さんは部屋を出て行った。ばたと扉が閉まる音を確認すると再生ボタンを押す。人妻にも興味はあるがやはりルリちゃんて抜くことにした。

部屋を出た七雄はそのまま足を進めることもなく、扉に背を預け、腕を組むと目を瞑った。

「うーん」

彼は想像する。親友に童貞を先に捨てられたユーキの切なさを。一緒に走ろうね、と約束していたはずのマラソンなのに、いつの間にか先を行かれた侘しさ。しかしユーキはサトシの初体験を妬むことなく心の底から喜んでいた。

（その友情や天晴れ。なんとかしてユーキにも女抱かせてやりたいなあ。でも今手持ちのセフレ少ないんだなあ……アカリちゃんと3Pやるか？ 絶対無理だよなあ。俺のセックスの虜にはなってるけど、俺の虜にはなってるわけじゃないしなあ。そもそもサトシの

友達つてのが無理だし、3Pそのものもまず不可能だろう)

そんな事を考えながらうんうん頭を捻る。そして彼の頭の中でぴこんと音が鳴り響いた。

「俺って冴えてる」

両手を叩いて軽くガッツポーズ。

「ん？　　までよ。さらにあれをこうしてそうして……」と指揮を振るかのようにな差し指を中空で舞わせた。

「……よし、この作戦でいこう」

彼は無邪気に笑うと、「待ってるよユーキ！　俺が童貞捨てさせてやるからな！」と宣言して、スキップしながらとりあえずコンビニへ酒を買いに向かった。

ほぼ同時刻。

アカリはS市のだ真ん中を通る一級河川S川河口近辺の川辺に立っていた。一級河川らしくその川幅や水量はかなりのもの。今が夜中であることを考えると、女の子一人で近づくには危険な場所であ

ると言える。しかし彼女に注意を促す人間は居ない。誰も彼女を認識できないからだ。こんな夜更けに袴を着た女の子が竹刀のようなものを持って川辺に居たら、それだけで怪訝に思われるだろうし、何より彼女と対峙しているそれを目にしたら、正気を保てるかどうかも定かではない。

うっそうと生い茂る雑草の中、信綱の切っ先が捉えるが巨大な蛙。二トトラックほどはあるだろうか。そんな目も眩む奇異を目の前にしても、少女の瞳には不安も恐怖も灯らない。

ただ空が広がるように、彼女の意識は眼前の敵を包み込む。

ぐるぐると喉を鳴らしているだけだった蛙は不意に口を開けると真っ赤な舌先がロケットのような勢いで発射される。そのぬめりを持った器官は一瞬で信綱に巻きついた。しかしアカリは中段に構えたまま微動だにしない。そもそも避けようとも抵抗しようともしなかった。まるでその舌は自分にとって何ら脅威にならないとばかりに、最初の姿勢を崩さない。それは慢心や油断ではなく、確信を更に超える感覚。すぐ傍らで轟々と鳴り響く川の水流音に耳を傾ける

余裕すらあつた。

信綱を握つた手をやや手元に引き、そして切つ先を下げる。舌の拘束はそれなりに効果があるようで、大きく振りかぶることは不可能。しかしそれでも彼女に焦りは無い。そのまま切つ先に魔力を集中。一呼吸の充填で目が眩むほどの魔力光を帯びる。

先手を打ち相手の得物を拘束した有利な状態のはずの蛙が舌を離そうとする。本能が危険を察知した。

「遅い」

その声には相手を見下すでもなく、侮蔑するでもない。ただただ厳格な冷たさが伴っていた。遥かに力量が劣る弟子に注意するような冷めた一言。

舌が信綱から離れるより速く、彼女の突きの動作から槍のように光線が放たれる。それは槍というよりはもはや銃撃。銃撃というよりは砲撃。

瞬きする間もなく蛙の眉間に大穴が開く。

それでもまだ生命力を完全には失っていない。戦闘は続行不可能

だろうが、手足を動かそうとする気概は感じられる。

そんな瀕死の敵を目にしようが、彼女に慈悲の心は宿らない。愛する人の命を喰おうとする存在を彼女は許さない。自分たちの未来に陰を差そうとするのなら、どんな手段を用いても取り払う。そんな曇り無き覚悟の中、一瞬七雄の面影が脳裏にちらついた。戦闘中の雑念は万死に値する。しかし彼女の潜在意識は、『それなら奴はどうなんだ？ あたしとサトシにとって障害ではないのか？』と自身に問い掛けることを抑え切れなかった。

動揺とも言えないほどの微かな思考の揺れ動きの中、彼女は上段に構え、そして魔力を練ると、更に一の太刀を蛙に振り下ろした。両断、というよりは押し潰された、という表現が当てはまるカルマは完全に力を失い、そして霧消した。それを残心の姿勢で見届けると、「あたしはあいつを、利用しているだけだ。サトシを、救うために」と無表情で一人呟いた。

それにしても一の太刀を連続で二度使ったのに疲労感はそのままでもない事に驚いた。光線の幅も明らかに太くなっていた。しかし

その成長を心から喜ぶことは出来ない。大切なものを犠牲にして手に入れた力。どこか遣る瀬無い感慨に耽っていると、ぱちぱちぱち、と河原の土手から拍手が鳴る。振り返ると、あの時の女二人がいた。大柄な男は居ない。見物客が居る事は戦闘中からわかってはいたが、その程度では集中の妨げになることはない。故に放っておいた。

「あはっ、お見事ね」

ふわふわの髪をした小柄の女性がうっとりするように笑う。無視してこのまま帰ろうかとも思ったが、ルリを助けてもらったことを思い出し、息を一つ吐くと言葉を返す。

「一の太刀は二の太刀を必要としないからこそ一の太刀です」

だから先程のは失敗なのだ、と言わんばかりにアカリは微かに肩をすくめた。

「ストイックなんだね。アカリちゃんは」

「あたしの問題じゃないです。技の由来がそういうものなので」

あくまで事務的に淡々と答える。

「それじゃあそういう技にしたらいいよ。同じ相手に対しては一度、

それも初撃にしか使えないって。そういう制約は自分で勝手に応用出来るはずだよ？ 多分技の性能も上がると思うし」

人差し指を顎に添えて、ニコニコとそう話す紺野ユカリの言葉にアカリは素直に頷く。

（なるほど、それは確かに良い。そもそもそういう理念において作られた技のはずだ。仕留め止め切れなかった後のことは考えないくらいに覚悟が良い）

「有難うございます」

助言に対する礼だけすると、その場から足早に去ろうとする。しかしそれを制するように紺野ユカリが口を開いた。斑鳩トモエはその横で、存在を消すように静かに佇んでいる。

「ねえねえアカリちゃん？ 進路ってもう決まってる？」

「一応……推薦で進学を」

訝しむように事実だけを返答した。いまだに魔術師などという得体の知れない二人組にアカリが警戒心を解くことは無い。しかし七雄と一緒にサトシを救うためには助力が必要になる可能性がある。

事実一度助けられている。少なくともわざわざこちらから敵対する必要は無い。

「魔術師になってみない？」

紺野ユカリはニコニコと、まるで友達を映画に誘うような気軽な口調でそんな事を口にする。

「……興味ありません」

「世界を救う使命って素敵でしょ？」

「想像できません」

「あ、お給料は勿論出るわよ」

「結構です」

「もちろん危険な仕事もあるから、それなりに高待遇だけど」

「そういう問題ではありません」

「学校行きながらでもいいよ？　大半が学生のかたわらでバイト感覚でやってる人や、副業としてやってる人が殆どだし。特にアカリちゃん達みたいな魔法少女上がりの子はそうなんだよね？」

隣の斑鳩トモエにそう問い掛ける。長身の女は腰を屈めて紺野ユ

カリの耳打ちした。それに耳を傾けながら、「ふん……ふん……ふん……あなるほど」と感心するように、爛々とした瞳をさらに丸くする。

「あのね魔術師になるのって魔法少女のままってわけじゃないんだよ。魔法少女辞めて魔術師になり直すの。別に試験とか修行とかもないから大丈夫。魔法少女として得られた経験で、すぐにでも魔術師になれちゃうの。だから好きな人とも何の制限もなくエッチできるし、魔力補給のために他人とエッチしなくて良いんだよ？ ほら、このトモちゃんだって、今は旦那さんとしかしてないんだもんね？」

そう振られたトモエは無表情のまま頷くが、若干の逡巡が見られたのは、『今は』という部分に引っかかりがあったからだろう。ユカリに悪気が無いのはわかっているのに、彼女も怒るに怒れない。

ともかくにもその言葉は確かにアカリにとって大きな驚きだった。彼女にとって魔術師の道は論外だったのは、魔力補給の条件が継続すると思ひ込んでいたからこそ。しかしそれは勘違いだとわかった。それでも彼女は首を横に振った。そもそもそんな得体の知れない世界に思いを馳せる余裕は無い。

「大体、魔術師って何するんですか？」

「色々な仕事があるけど、アカリちゃんには戦ってもらうかな」

「何と？」

「色々」

「それじゃ話になりません」

「最近だと、欧州から来た吸血鬼との戦いが一番大きかったかな。

もう終わったけどね。あの時のトモちゃん格好良かったなあ。グールの軍勢を蹴散らすトモちゃんの下僕達……ああ」

アカリは両手を頬に当ててうっとりするユカリに背を向けた。

「やっぱり結構です」

「戦うのは怖いか？」

その背中に冷たい声が掛かった。責めるでも労わるでもない、ただ自分の意志を確認したい。そんな声だった。不思議と好感が持てる。振り向かないまま答えた。

「サトシの為なら怖くないです」

「あはっ、アカリちゃんって格好良いな。あたしも彼氏にそんな

こと言われてみたいよ。本当にバイト感覚でいいからさ。もし興味が出たら言ってみてね？」

そんな言葉を背に受けながら、彼女は地面を蹴った。

（そう。サトシの為なら、何も怖くない。しかし社会のため、という漠然としたものが対象となると、どうだろうか。戦えない、とまでは言わない。武芸者として腕を試したい、なんて欲求が無いとも言いが切れない。しかし今あたしの胸で一番大きく疼く想いは、この戦いを早く記憶から消し去りたい、ということ。完全に忘れるのは不可能だろう。心にも身体にも色々と刻み込まれてしまった。だからこそ出来る限りこの世界から遠ざかりたいのだ。この赤黒い夜空と青い月の世界に関わりたくない）

カルマを倒し二人組と別れた帰宅の途中、ふと目にした光景にげんなりとする。またか……と自分のこの巡り合わせに悪さに辟易とした。コンビニから出てきた人物に嫌でも見覚えがある。向こうもこっちへぶんぶんと大きく手を振ってくる。あたしは舌打ちをする

と、腰に手を当てて呆れるように口を開いた。

「だからさ、周りから見たら、あんた、一人で手を振ってる危ない奴だよな？」

「ばっかお前、彼女見かけたのに無視する男いねーだろ」

もはや反論する気も起きない。面倒くさい。もう好きなように言わせておけば良い。そうだ。あたしはこいつを利用してただけなんだから。せいぜい、今だけ良い気になっていればいいのだ。

「あれ？　なんか魔力減ってね？」

「カルマ倒した。あたしのだけど」

「ああ成程」

「何よその軽い感じ。もっと何か劳いの言葉とかないわけ？」

こいつと話していると、いちいち喰って掛かるような口調になっ
てしまう。ベッドの上では良いように弄ばれるから、せめて日常で
は主導権を取りたいという欲求が、こんな攻撃性を掻き立てるのだ
ろうか、などと自己分析したところで、そういえば自分はサトシ以
外の男にはいつもこんな感じだったじゃないか、と思い直す。どち

らにせよ、こいつと対峙していると、自分らしさとは何だったかと揺さぶられる。

「アカリなら楽勝だって知ってるし」

「ったく」

「で、どうする？ 今日中に補給しとく？」

「はぁ？ 今日はもうしたじゃん」

「本当お前は男心わかってねーなあ。惚れた女なら何度だって抱けるんだよ」

大袈裟に肩を落として溜息をつく。本当、面倒くさい。なんて返事したらいいのかわからないし。でもまあ、嬉しくない、わけでもないけど。

「ま、それに補給は出来る限りこまめにしといた方が無難だしな。」

俺がお前を守りたいけど、出来る事はそれくらいしかねーし」

唐突に、真面目な顔でそう言う。そういうのは、少し、卑怯だと思う。

「わかった。わかったから。後でタクヤンとこ行くわよ」

しっしつと、犬を払うように手を振った。

「ああ……まあいいか」

「なに？」

「いや今ユーキが遊びに来てんだよな」

そういうえば今日の夕方、補給をした帰りにマンションの近くでユーキ君に会ってそんな事言った気がする。あの時は心臓が飛び出るかと思っただ。

「まあ泊まってくわけじゃないし、アカリが来る前に帰すけど」

「そうしてよ」

「それかさ、アカリン家でやらない？」

「なんでそうなるのよ」

「いや何回もウチに来てもらうの悪いしさ」

「本音は？」

「一回アカリの部屋行ってみてー」

はあ、とまた大仰に溜息をつく。

「わかった。わかったわよ」

「え？ マジで？」

「疲れたから、もう出歩きたくないし、それに直前までユーキ君が居たってのが何かやだ」

小躍りしながら喜んでいるタクヤを横目で見ながら、またマンシヨンまで行くの面倒くさいし、それに、こいつはただのサトシを助けるための道具なんだから、別に部屋見られても良いし。と言いつつ、どのように何度も心の中で反芻しながら家路につく。その足取りが少し軽いような気がするの、カルマを倒して浄化が近づいたからに違いない。これからのタクヤとの行為が楽しみなんてことは無い。

そういえば、とその事実に気づく。立ち止まり啞然とした。いつからだろう。サトシの前以外では、お互いの名前を呼び合うのが当たり前になってしまっている。さっきも何も拒絶反応が起きなかった。

あまりに自然とそうなっていた自分に絶句する。

下唇を噛み胸を掴んだ。大したことじゃない。そう。そんな事は、大したことじゃない。時間と労力を無駄に浪費せずに『補給』する

場所を改めただけのこと。仕事仲間と名前を呼び合うようになっただけのこと。それだけのこと。そう言い聞かせ、再び足を進める。その足取りは少しだけ重くなっていた。

部屋に帰ると実体に戻る。上体を起こすと、天井を仰いで息を吐く。これから、ここでタクヤとエッチするんだ……。首だけを回して部屋を見回す。

掃除とか……は良いよね。普段から綺麗にしてるつもりだし。ていうか、あいつのために準備しなきゃいけないのが癪だし。

「あ」

視界に映ったそれだけは、そのままというわけには行かない。ベッドから立ち上がり、机の前まで移動して、それに手を伸ばす。

「……ごめんね」

写真立ての中で笑っているサトシにそっと口付けをすると、それを胸の中でぎゅっと抱きしめる。そして引き出しの中に締まった。

「まだ時間あるよね」

そう呟きシャワーに向かう。実体に影響が無いとはいえ、先程の

カルマのぬめりを思い出すと、身を清めたくて仕方が無い。脱衣所で下着を脱ぐと既に薄っすらとシミになっていた。もう何とない訳しようが、身体はタクヤに抱かれることを期待してしまっている。忌々しそうに下着を籠の中に投げ捨てる、「くそっ」と一人で悪態をついた。

「おやおや。どうやらうちのお姫様はご機嫌斜めらしい」

振り返るとお母さんが立っていた。それも下着姿で。髪が濡れているので、あたしの前に入浴していて飲み物でも取りに行っていたのだろう。

それにしても母親とは思えない肢体だ。あたしが男を知り、自身が女であることを思い知らされた今だからこそ、その起伏に富んだ身体がどれほど性的なのかを理解した。最早自分の子だと思っているサトシの前でも平気でこの格好になるのは止めて欲しい。男にとってには目に毒以外の何物でもないだろう。言うまでもなくあたしの方が若い、それでも暫くは勝ち目が無いと思ってしまう。体格や細さはそれほど変わらないのに、出るべきところの肉感は同性とし

て引け目を感じてしまう。これは成熟した女性の身体というよりは、きつと先天的な資質なのだろう。いつか見たルリの裸体と被る。特別何かスポーツに打ち込んでいるわけでもないのに、一体どうやってこんなスタイルを維持しているのか不思議で仕方が無い。

「なんだ。人の身体をそんなじろじろと舐め回すかのように見て。照れるじゃないか」

そんな事を口にしながらも胸を張って豪胆に微笑む彼女からは、照れなど一切感じられない。

「……お母さんってスタイル良いよね」

劣等感からやや肩を落とす。

「ん？ そうか？ まあ確かにおっぱいとお尻は昔から大きかったな。思春期の頃は異性の目も気になるわで邪魔でしょうがなかったが、お父さんも気に入ってくれたようだから由としている」

やはり何の銜いもなく淡々とそんな事を言い放つ。彼女はけしてデリカシーが無いわけではない。むしろ性的な問題や倫理観に対しては非常に厳格とも言える。しかしそれはあくまで対外的なもので

あつて、身内と判断すると途端に警戒心を緩める。懐が大きいというか情深いというか。

「しかしアカリも随分と成長したじゃないか。母として感慨深いよ」
うんうんと頷きながらそう言う。一切の他意を感じない口調だが逆にそれが恥ずかしい。

「馬鹿っ！」

あたしは顔を真っ赤にして脱衣所の扉を閉めた。

ガラス戸の向こうからは、「やれやれ。お父さん。アカリもついに反抗期のようにだ」「いいからお前は早く服を着ろ」と両親の会話が聞こえてきた。

鏡を見る。あたしの身体が映っていた。思わず目を逸らしたくなる。魅力的かどうかという問題ではない。魔法少女になる前は脱衣所の鏡の前では、いつかこの全てをサトシに捧げるのだと考えて胸がときめいた。今ではざわざわとした不快感が入り混じる。

シャワーを浴びる際に、つついっい陰部を念入りに洗う。バスタオルを巻いたまま寝室に戻るとベッドの上で胡坐を掻いた。瞑想がて

ら気を静める。いつでも来い。そうだ。これは敵を迎え撃つ心境。
気分は永祿の変の足利義輝。

……。

……。

しかし待てども待てども憎き相手からの連絡は無し。気分は巖流島の佐々木小次郎へと変わる。

馬鹿馬鹿しい。そのままベッドに倒れこむ。たかがセックス。何かが減るわけではない。しかし、あたしの中の何かは変わりつつある。それが何なのか分からないのもどかしいし、不安にもなる。携帯が鳴る。飛び起きてそれを開く。ドキドキしてるのは、ビツクリしたからに他ならない。

「今から行くから」

タクヤのその言葉が耳に入った瞬間、鼓動がさらに早まった気がする。

「あ、そう」

「家の前ついたらまた電話するわ。姿消して入ってくから」

「はいはい」

素っ気無く返して電話を切ると、溜息をついた。口元が緩みそう
気配を感じたので、軽く自分を殴る。まだ、ドキドキしている。余
程驚いたのだろう。そうだ。きっと着信音が大きすぎるんだ。あと
で設定を変えよう。

居ても立ってもおられず思わず立ち上がると、もう一度引き出し
の中のサトシを抱きしめる。

「サトシとのエッチのがずっと幸せなんだからね」

誓うようにそう呟き、また机の中に仕舞うと、自分がまだ裸なこ
とに気づく。一応外まで迎えに行かないといけないから服を着る必
要があった。どうしよう。まあ、パジャマで良いか。下着は……ま
あ似たようなのしか持ってないし。黒のは洗濯中。……ああいうの、
もっとなんておいた方が良くないかな？いくらなんでも無頓着すぎる
気がしてきた。殆ど白しか持ってない。サトシに直接聞くのは少
し恥ずかしいしな。

そうこうしているうちにタクヤが到着する。

「おー、これがアカリの部屋かあ。なんかシンプルでイメージ通りだな」

部屋の中でうろうろと物珍しそうに徘徊する彼のお尻を思いつき蹴飛ばす。部屋に入るやいなや、防音の魔術は掛けてもらっていたから、手加減無し of 気持ち良い乾いた音が鳴り響かせる。

「女の子の部屋じろじろ見んな！」

「悪い悪い」

そう笑いながら、顎を摘んでくる。あ、キスだ……。もう何度も繰り返した流れだから、なんとなくわかる。

なんかやだな、こういうの。まるで、恋人みたいな以心伝心。

あ……っん………ちゅ、っん……。

……はあ………やっぱり、すごい、上手……。全然違う。すぐに、ぼおってなる。

「パジャマ姿のアカリすごい可愛いから脱がすの勿体無いけど」

さり気なく一々褒めてくるのがくすぐったい。胸の前のボタンを外しながら自然に差し込まれる舌を受け入れながら、こいつの齒の

浮くような言葉が鬱陶しいと思わなくなった自分に気付く。

「普通の、んっ、パジャマ、だし」

舌を絡ませながらもなんとか会話を交わす。黙ったままだと褒められて嬉しいみたいで悔しい。

「アカリが可愛いから可愛いんだよ」

今度は言葉を発することが出来ないくらい奥まで舌を絡めてくる。あたしも両手を彼の肩にそっと置いてそれに応える。

くちゅ、くちゅ、くちゅ、と唾液を舌で練り込ませる音が耳に入る。あたしとタクヤが二人で奏でている音。彼の舌と唾液の温かさ。密着している胸板のたくましさ。まさに目前にある、少し意地悪そうだけど、きりっと男らしい瞳。それに射貫かれるだけで、あたしの太ももに愛液が垂れていってしまった。

向かい合ってキスをしていたあたし達は、いつの間にかほぼ全裸になっていた。タクヤはその辺が本当に上手い。いつもいつ脱がされたのかわからないまま裸になっている。キスに夢中になっているからかもしれない。

タクヤは自分から責めるだけじゃなく、時折あたしから責めさせるように舌を引っ込める。あたしは切なくなつて、自分から彼の口の中をまさぐりにいく。今も必死に彼の舌を、フェラチオするみたいに吸っていた。

タクヤと熱く視線を交わしながら、ちゅうちゅうと音を立てて、甘えるように彼の舌を吸う。

彼の両手があたしのお尻を左右から搔き分けるように揉む。そして、指が、お尻の中に入ってきた。まだ少し不快感というか、違和感はある。でも少なくとも痛みはない。あたしのその部分は、すっかりと柔らかく彼の指を受け入れるようになってしまった。何よりあたしは、悔しいけど彼とのキスに夢中。彼の指の腹が、あたしのお尻の中を優しく撫でて来る。それに呼応するように、あたしは彼の舌をフェラチオ。あたしのおへそ辺りを熱く硬い肉の感触で押し当てられる。見なくてもわかる。脳裏に焼きついて離れない存在になつてしまった。それでも、やはり、直接見たい。お互いの舌先でつんつんとキスしながら視線だけを下に向ける。勃起しきつて反り

返ったおちんちんの先っぽが、あたしのお腹を押ししているのが見える。その瞬間、「はう……」と情けない声が勝手に漏れる。あたしを力強く、男らしく、逞しく貫いてくれるタクヤのおちんちん。激しく滑らかな腰使いで、ごしごしとあたしの中を擦ってくれるセックス。

視線を元に戻すとタクヤの切れ長の瞳と目が合う。それだけで下腹部がきゅん、と疼いた。依然舌先でちろちろと舐めあいながら、視線だけであたしの意志を伝える。伝わったのか彼はお尻から指を離す。お尻の穴が少し寂しい、と思ってしまった。そんな馬鹿げた余韻を引きずったまま、あたしはゆっくりとその場に腰を下ろし、膝立ちになる。目の前に、ぐいっと上へと反り返った先には大きく膨らんだ亀頭。胸が締め付けられる。これで、また犯される。かき混ぜられる。この熱さと硬さを、あたしはもう知っている。憶えてしまっている。自分の奥底が愛液を垂らしながらひくついているのが自分でもわかる。先程までの愛撫のせいか、お尻の穴もじんと甘く痺れていた。まずは両手を彼の膝に添えて、顔だけを近づける

と、鈴口にキスをする。ちゅう、と唇を尖らせ、押し当てるように。ゆっくりと、優しく、でもぎゅうっと。二秒？ 三秒？ もっとかもしれない。契約書に判子を押すみたいに、これは、自分のものです、と証明するように、タクヤのおちんちんにキスをする。後で、気持ち良くしてね？ という意味もこめて、上目遣いで彼を眺めながら、誓いのキスをする。我慢汁が出ていたから、そのまま、ちゅう、ちゅう、と音を立てて吸った。もちろんそのまま飲む。後は、やはりいつも通り、しゃぶりながら力りに舌を巻きつかせたり、裏筋に舌を這わせたり、睾丸を啜えて転がしたり、それで我慢汁が垂れてきたら、また口をすぼめてキスをして、ちゅうちゅう吸うのを繰り返す。タクヤのは亀頭が本当大きいから、たまに齒が当たってしまふ。その度に、ごめんね？ という意志を込めて上目遣いに彼を見上げるが、彼は優しく頭を撫でて来るだけ。なんだか申し訳なくて、もつと上手くならなくちゃ、なんて気分も、少しだけ、本当に少しだけ……有ったりする。

お口の中でタクヤがさらに逞しさを増していくと、なんだか誇ら

しい気分にする。ただの振りとはいえ、まあその、一応、今だけは、彼女？らしいから、彼氏が気持ち良いと、そりやあたしだって嬉しいし、それに、彼氏のおちんちんが男らしいと、なんだか、ちよつと優越感のようなものにも包まれる。このまま奉仕したい気持ちと、貫かれない気持ちが相反する。でもそこはタクヤがリードしてくれる。

強引にあたしをベッドに押し倒すと、あたしを犯そうと押し掛かってくる。優柔不断に気持ち揺れ動いている中、彼氏がそうやって男らしくしてくれと、その、なんだか……正直、格好良い、って思ってしまう。ただでさえ顔は、まあ、全然タイプじゃないけど格好良いし。多分。いや別にどうでもいいんだけど。本当、タイプじゃないし。だいたい、サトシが一番だし。

「四つん這いになって」って言われたけど、仰向けに寝たまま、「……このままが良い」と答える。我ながら、なんて女々しい声だ、と悲しくなる。本当なら今すぐ殴りつけてやらないといけない相手ののに、あたしの身体はくったりと脱力して彼を待ち受けている。

「なんで？」

そう聞きながらも、タクヤはリクエストどうり、正常位で挿入しようとしてきてくれる。こっちの要望を聞いてくれたんだから、嘘やだんまりは良くないなと思った。

「……タクヤのチュウ、好き、だから」

どんな顔でそんな事を言ったのか、自分でもわからない。でも滅茶苦茶恥ずかしくて、顔が真っ赤なのは自分でもわかった。きっと情けない顔をしていたのだろう。彼はふと微笑むと、亀頭をおまんこにあてがったまま、顔を近づけてキスをしてきてくれた。

んっ。

ちゅっ、と可愛い音が鳴る。そして彼の両手が、あたしの両手を掴む。どちらからともなく指を絡めあい握った。そして彼が腰を前に突き出すと、それだけでぬるりと彼があたしの中へ入ってくる。サトシの時とは全然違う。とても手際良く、そしてスムーズにあたしとタクヤは一つになる。全てが密着する。でもやっぱり本当は難しいものなのだろうかという疑問を拭えない。だってサトシは、あ

んなモタモタしてたし。タクヤが特別上手なのだろうか。

「あんっ」

彼が一気に奥まで貫いてくる。重なる瞬間。この時が一番好きかもしれない。あたしのおまんこが、彼のおちんちんと抱き合う。彼が力強く貫き、そしてあたしが柔らかく包み込む。イク、ってわけじゃないんだけど、この瞬間は、いつも独特の甘い痺れに覆われる。タクヤはそれがわかってくれてるのか、いつも挿入直後は、動かずに啄ばむように優しくキスをしてきてくれる。

んっ、んっ、ちゅっ。ああもう、気持ち良い。

心と身体が同時に溶け出す瞬間。キスを続けながら、ゆっくりと腰を前後させ始める。バックはバックで好き。ガンガン突かれるとすぐに爆発するように真っ白になってしまふ。でもこうやって抱き合いキスしながらの正常位は、なんだか、ふわり、と溶けそうになる。こっちの方が、あたしは好きだ。

「あっ、あっ、あっ、あっ ♡」

ゆっくりとカリの出っ張った部分が、あたしの中をぐにゅぐにゅ

と優しく引っかいていく。それに加え、タクヤの舌があたしの口内をまさぐる。上も下も、あたしの身体を、支配された、と感じると、もはや抵抗する気すら起きず、ただ黙ってこの人に身体を預けよう、と思ってしまう。力強く、優しく、経験豊富な男の人に愛されていることに、あたしは女として充実感に満たされる。

「あん、それ！ 奥、ぐりぐりされるの好きっ♥」

「知ってるよ」

いや、優越感と言うべきなのかもしれない。今この時だけはこの男はあたしのものである。あたしはこの男の女なのだ。世界中の女を悦ばすことが出来る男に求められている。選ばれている。そんな幸福感に包まれる。それが不貞行為だとわかっていても、身体の奥底から沸き上がるふわふわした快感は止められない。

「あんっ！ そこっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ すごくいい！ その動き、気持ちいい！」

同時に引き出しの中のサトシのことを想う。あたしは彼を愛しているはず。それはこうしてタクヤのよがらされている今も、何も疑

問に感じることは無い。あたしはサトシを愛している。彼の為なら命を掛けて戦うことに何ら躊躇は無い。もしタクヤのために命を掛けると言われたら、絶対に断るだろう。

なのに、「ああっ！ んっ！ いいっ♥ あっあっあっ♥ タクヤっ♥」あたしは必死に彼の名前を呼びキスをねだる。あまつさえ自ら腰を突き上げるように振っている。そうすることがたとえ偽りでも、愛し合う二人の正当な行為と言わんばかりに。

「イクっ♥ イクっ♥ イク♥ タクヤっ！ もう我慢出来ないよ！ もっと奥まで来てほしい！」

ただただ快楽に流されて発したその言葉に愛情の欠片もない。しかしそれでもそんな戯言を口にしながら彼と粘膜を擦り合わせ続けると、頭の中が溶けそうになり、肌が溶け、性器が溶け、やがてタクヤと一つになる。

女とは違うごつごつとした身体の男と溶け合い交じり合う感覚。

絶頂しながら溶けたあたしの意識は、彼の逞しいおちんちんの延長線上になれたような、彼の一部分になれたような多幸福感を得られる。

ほぼ失いかけた意識が戻ると、あたしは抱きかかえられて対面座位になっていた。一番好きな体位。タクヤはこっちから要求しなくても、あたしが求めていることを察してくれる。

はあはあと息を荒げながら、彼の端正な顔つき、適度に鍛えられた胸板や腹筋。そしてさらに視線を下ろすと、あたしを貫いているおちんちんの根元が視界に映る。彼の首に両腕を回し、上目遣いで視線を合わすと、不意にあたしの口から「……好き」と声が漏れてしまった。

その言葉は真実ではない。しかし演技でも無かった。あたしはタクヤが好きなのだろうか？ それは違う。強がりでも何でもなく、確信を持って即答できる。サトシに抱く感情とは明らかに違いすぎる。

しかしそれではあたしは、あたしの女の部分は、この男を求めないのだろうか、という問いには確たる答えを持たない。それはわからない。ただ一つ、はっきりと言えるのは、「あたしの身体、タクヤの事、憶えちゃってる……」ということだろう。

「あたしのおまんこ……タクヤのおちんちんの形に……なっちゃつてる……」

タクヤは褒めるように優しく頭を撫でてくれる。正直すごく嬉しかった。でもそれだけじゃ物足りなくて、自分から唇を合わせにいった。彼はそれを迎え入れてくれる。

同時にまたあたしのお尻の中に指を入れてくる。一度に二本。しかしにゆるりと、あたしのお尻の穴はそれらを受け入れた。腸内で感じる彼の指の感触に、淡い電流が頭に響く。

「俺のになっちゃった？」

嬉しそうに微笑みながら彼がそう尋ねる。ぐにぐにと、お尻の穴をほぐすように二本の指でかき混ぜながら、そう尋ねてくる。

肯定したくはなかった。しかし否定も出来なかった。溶かされるような絶頂を与えられたあたしは、あたしの身体はその幸せを与えてくれた目の前の男を、同様に悦ばせたい、と願っていた。彼の肉棒を包むあたしの肉壁は、ぐねぐねと、まとわりつくように蠢いている。あたしの意志とは関係なく、あたしのおまんこは彼に最高の

射精をしてもらいたがっていた。子宮口に至っては最初に挿入された時から、彼の亀頭を啜るように降りてきている。あたしはゆっくりと自分から腰を前後させ始める。

「はっ、はっ、はあ、あっ、はっ……：：：そんなわけ、ないでしょ……：：：全部、サトシの、なんだから……：：：おまんこも……：：：唇も……：：：全部……：：：あんっ♡」

ようやく口答えをする気力が戻ったと思ったなら、ちよつとした動きでいとも簡単に瓦解した。

彼はキスをしながら、片手でお尻を、そして片手で胸を触ってきてくれる。今は激しくはないが、あたしとタイミングを合わすように、ねつとりと、かき混ぜるように突き上げてもくる。全身を使っであたしを愛してくれる。

ただへこへこ腰を振っていたサトシのセックスが脳裏によぎってしまふ。キスも愛撫もない、力強さすらないセックス。

目の前の男と身体を密着して、おっぱいが彼の逞しい胸板で潰れるのを心地良さを感じる。頼りになる。この男の人はどこも硬くて

大きい。その上あたしを強引に引つ張ってつてくれる。

依然身体が溶け消えそうなほどの快感の中、同時に大きな失望感が襲う。

「はあ、んっ……はう、あっ……あああっ、やっ、はあ」

どうしたって、無意識に対比してしまふ。激しくも、技巧に満ち溢れたセックス。ぎこちなく弱々しいセックス。

雄々しく、見るだけで胸を鷲づかみにされるおちんちん。普通のおちんちん。

あたしはタクヤと唇を甘噛みしあい、テンポを合わせて腰を押し付け合いながら、「……違う」と呟く。

タクヤはきよとんとした顔を浮かべていたが、あたしは、「違う違う違う！」と微かに首を振りながら呟く。

サトシは初めてだったから。あたしも気持ち良くなるの我慢しなきゃいけないから。そうだ。仕方が無い理由ばかりだったんだから。だからあたし達もきつと、きつときつと、こんなセックスが出来る。いつかきつと、出来るようになる。身も心も溶かしあうよう

なセックス。サトシとだって出来るに決まっている。

「あっ！ んっ！ んっ！ タクヤ！ だめっ！ あたし、もうだめっ♥ お願い、きて！ きてっ！」

愛し合いながら、一つに溶け合う恋人セックス。

「好き！ 好きなの！ タクヤのおちんちん、好き！ 好き！ あっ！ あっ！ あっ！ んっ！」

肌と肌が、粘膜と粘膜が、細胞が求め合う雄と雌の繁殖行為。

「出してっ！ ザーメン出して♥ あたしのおまんこ、タクヤのザーメン欲しがっちゃってるから♥」

そんな本当の恋人ととしてのセックスがいつかサトシとしたい。だから今はごめん。今だけはタクヤの事だけ、考えるね？ こいつに抱かれてる時に、サトシの事考えると辛いから。サトシのセックス、その……全然………駄目………だったから……。サトシのおちんちん、タクヤと比べると……全然………ドキドキしないから……。だから、今は……ごめん。比べたくないから。比べちゃうと、その………ごめん……。サトシに、ガツカリしたくない、から。

だから、今だけは、この人の事だけ、考えるね……。

「あんっ♥ あんっ♥ あんっ♥ いいっ、いい♥ 気持ち良い♥
ああっ、すごい！ タクヤ、くるっ、くるっ、きちやう！ ……あ
あっイクイクイクイク！ お願ひ、一緒に……きてっ！ ……ああ
もうっ、タクヤ、本当にすごいよ♥ 変になっちゃってる……あっ
あっあっあっ！ きて！ きてっ♥ あああっ、くるっ、ああああ
あああっ！！！」

おちんちんがどくどくと脈打つ。その度に彼の精子があたしの中へ送られているのだろう。それを想像するだけであたしの身体はびくびくと震え、そしておまんこは彼の精子をねだるように、ガチガチの生殖器を愛おしそうに抱きしめる。対面座位で抱きついたまま、彼の射精をしばらく受け止め続ける。再び意識を甘く溶けさせられたあたしの理性は、それでも今は彼と目を合わせてはいけない、と注意を促す。しかし身体は言うことを聞かない。彼の顔を見たい。あたしを気持ち良くしてくれた、あたしで気持ち良く射精してる男の顔を見たい。目が合う。やばい。やっぱり、こいつ、格好良い。

………ぜ、全然……タイプじゃない………けど………ドキドキ、
する。最高のセックスをしてくれた眉目秀麗な男に、まさに今その
余韻も絶頂を迎えようとする時に、目の前で「愛してる」と言われ
た人生経験未熟なあたしに、胸をときめかせるな、と言われても無
理な話だった。

「……あたしも」と明確な言葉を使わずに返すことが、せめてもの
抵抗。ただでさえ身を溶かしあうセックスの直後に、愛の言葉を交
し合ったあたしは、意識が宙に舞い浮かぶような恍惚の中、彼の性
器がさらに一度、ぴゅっ、と精液を吐き出したのを感じた。同時に
あたしの子宮口がこれ以上ないほど口を開いて、その子種を受け入
れたのを実感する。

下腹部の奥のさらに奥が、じんわりと熱を帯びたのを確かに感じ
た。

あたしは愛され、そして愛したのだ。たとえ偽りでも、演技でも
あたし達は愛し合ってしまった。タクヤはあたしの全てを求め、そ
してあたしはタクヤの全てを求めた。

もし彼が生殖能力の無い代理人じゃなかったら、これで絶対妊娠しただろうな、と確信抱くほどあたし達は溶け合った。

唇を寄せていく。再び彼からの愛の言葉を耳に受けながら唇を甘く重ね続ける。その言葉が鼓膜を震わす度に頭がぐにやぐにやと揺れた。

一片たりとも心残りの無いセックスをしたあたし達は、その余韻に甘々な空気のまま浸る。ベッドの上でいちやつくようにキスをしたりと後戯を繰り返す。心ではそんな事をしたくないのに、身体が男と離れる事を許さない。車が急には止まれないように、肌を重ねた男女も急には離れられないようになっていたのだろうか。

「アカリさ、明後日暇？」

肩を並べて寝そべりながら、可愛くじゃれつきあいながら、彼がそう言ってくる。

「暇だけど」

「面白いかない？」

「ええ」

露骨に顔をしかめてやる。

「ほら。前言ってたじゃん。服とか下着、買ってやるよ」

「いいよ別に」

「何でだよ？ バイトとかしてないから金無いだろお前」

「何でって……そんなの悪いし」

「ばっか。彼氏なんだから、彼女の服とか買うのは当然だろ」

「……それは、今だけ、だから」

「え？」

「だから、エッチの時だけ、って言ってんの！」

そう言って拗ねたように彼に背を向ける。いくらなんでもその境界線を破られるわけにはいかない。背を向けたあたしを、そつと抱きしめてくる。こういう時、男と女の基本的な体格の違いを痛感させられる。なんとというか、その胸板や背中 of 広さに安心させられる。

「じゃあ、友人としてプレゼントしたい」

「それもおかしいし」

冷たくそう言い返すが、腕を振りほどくことはしない。自分の目の前にある彼の腕を、かぶ、と唇で噛む。

ふう、とタクヤは息を吐くと、「じゃあ、魔法少女として戦ってる報酬としてならどうだ？ 俺のポケットマネーじゃなくて企業から出るからな」と言った。

「はあ？ そんなの駄目でしょ」

「いやこれはちゃんと正当な恩賞として認められてるぞ。ルリだってそういうお金だったら使ってやっても良いって言ってたし」

まあ確かに。そういう事なら貰っておいてもいいかとも思える。

「でも、タクヤと一緒にいく必要ないじゃん」

「いいじゃん。ほら、車出すし。荷物持ちもするし」

「ええ〜」

「な！？ 頼む！ 一生のお願い！」

「……絶対口出さない？」

「おお。アカリが買いたいもの買えば良いよ」

「じゃあ、まあ、別に、いいけど」

口を尖らせながらそう言う。

「よっしゃ。じゃあ明後日な？ 初デートだな？」

その言葉をあえて否定はしなかった。もう面倒臭い。

「それと俺明日居ないから」

「あ、そう」

わざと冷たく返事する。

「ちよっと野暮用でな。浮気すんなよ？」

「馬鹿じゃないの？」

「それは冗談としても、もしあれだったら補給はしとけよ？ まあ

お前のことだから他の男とってのは今更無理だろうけど六郎先輩なら大丈夫だろ。効果は薄いけどやらないよりはマシだしな」

その言葉に少しガッカリした自分に驚いた。いくら補給の為とはいえ、いくら同僚とはいえ、いくら元々のあたしの担当とはいえ、他の男とセックスするのを推奨してきたタクヤにガッカリした。そんなあたしを見透かしたかのように口を開いた。

「もしかしてあたしの事好きだって嘘だったんだな？ なんて考え

てねーだろな？」

「別に」

別に元々あんたからそんなの期待してない。はずなのに、少しだけ胸がざわつく感覚から必死に目を逸らす。

「あのな。お前の事が心配だからに決まってんだろーが」

「……ふうん」

「俺だっっていくら六郎先輩だろーが、今更お前を他の男に抱かせたくねーよ。ぶっちゃけサトシの時だっすげー辛かったんだからな？」

「わかったわかった」

「あ、信じてねーな」

「わかったってば。もう」

より強く抱きしめて振り返らそうとするタクヤに抵抗する。あたしは頑なに前を向いたまま。なぜならそんなタクヤの言葉ににやついてしまったから。本当馬鹿みたい。

更には耳元で、「な？ 今日、泊まっていいか？」などと尋

ねられる。

「調子乗りすぎ」

「駄目？」

そう言つて後ろから片手を握ると自分の股間に誘導してきた。それは微かに再び硬くなりつつある。それを握ると顔がかあつと熱くなつたが、「駄目なもんは駄目」と念を押しした。

どれだけ最高のセックスをしようが、その余韻などせいぜい十分。微かにうづく胸の痛みが、やがて身体全体を激しく蝕むことをあたしは知っている。もう何度も繰り返しているから。

翌日の午前。

七雄が向かった先は隣県に在るとある駅ビルの一室。扉横に貼つてあるネームプレートには何の変哲もない有限会社の名前が記されている。一見需細企業が間借りしている部屋にしか見えないが、その扉や壁にはあらゆるセキュリティに関する魔術が掛けられている。その扉はたとえ大の男が数人掛りで体当たりしてもびくともせず、

また、室内で手榴弾が爆発しても、振動はおろか音すら外には伝えない。しかし七雄がドアノブに手を掛け、「※※※※」と一般人には聞き取ることすら出来ない言葉を呟くと、その扉はいとも簡単に開いた。

「こんちゃーっす」

扉の先にはいくつかの事務机とその上に散乱する資料。そしてパーテーションを挟んでは、ピーカーや顕微鏡などが立ち並ぶ長机が一つ。その長機の傍に立つ、白衣を着た小柄な女性が何やら作業をしながら首だけで振り返る。片手には注射器。もう片手には、おそらく世界中で発売されてるどの凶鑑にも記されていないことが容易に推測できるほどの、特徴的な形状をした鼠ほどの小さな四肢動物。

「あら、珍しい。どうしたの？」

「ユカエモン。助けてー」

七雄はそう言いながら、紺野ユカリの下へと小走りで近寄ると、両手が塞がったままの彼女を後ろから抱きしめた。身長差が三十センチはあるという二人だが、七雄は顔を彼女の耳元まで下げて、「そ

れ、何すか？」と囁くように尋ねる。ユカリは抱きしめられたことに対しては何のリアクションも無く、平然としたまま、「バハムトの子供。風邪引いたみたいだからお薬打つんだよ」と答えた。彼女の幼いほどに小さな手の中では、赤みがかった鱗と羽のような突起が薄っすら生えた動物の赤子がきいきいと鳴いている。愛らしいと言えなくもないだろう。その口から時折火が漏れ出ていることに目を瞑れるのであればだが。

七雄の顔は耳元からそのまま彼女の顔を真正面から捉えようとする。ユカリは動じない。抵抗しようとしなない。二人の唇が重なるうとする瞬間、彼の側頭部に大きな衝撃が走る。

「痛えっ！」

堪らないといった様子でユカリから手を離し、頭を抑えながら仰け反った。同時に辞書ほどの厚みがある本が地面に落ちる。

「き、き、ききき貴様あっ！ 何をやっているうっ！！！」

部屋のさらに奥から、白衣を着た中肉中背の若い男が七雄を指差しながら、大股でどすどすとコメカミを抑えて蹲る七雄の傍まで一

気に近寄った。短髪の、清潔感のある風貌。七雄とは間逆の爽やかな目鼻立ちをしているその若い男は、怒りで肩をわなわなと震えさせている。

ユカリはそれを、ただぼうっと見つめていた。そしてふと思い出したかのように「あ、ごめんね」と手に持つ赤子に意識を戻すと、ニコニコと笑顔を浮かべて「はい。痛くないでちゆからねー」と手馴れた様子で注射をした。そんな安穩とした彼女の雰囲気とは正反対に、七雄を見下ろす青年の顔は憤怒で染まっている。

「貴様あつ！ ……貴様あつ！」

あまりに怒りに、その後の言葉が出てこないのは、彼の実直な性格の現れであろう。

「いてて」

そう呟きながら立ち上がる七雄を、両拳を力いっぱい握って睨み続ける。そんな二人の陰悪な様子などどこ吹く風いおった様子で、「はくい。良い子でしたね」とユカリは赤子を優しく長机の上にあつた小さなカーゴの中へと入れた。

「なんだよ。そんな怒ることねーじゃん」

唇を尖らせながら七雄を不満気に眩く。

「な、なななな、なんだと貴様っ！ こ、このっ！」

いまだ収まらない怒りに背中を震わし続ける男に、ユカリは困ったように笑いかける。

「清水君。彼にお茶入れてあげて」

「し、しかし主任っ！ こいつっ……」

「知ってるよね？ 同じ事を何度も言わせる人って嫌いよ。あたし」
「ぬっ、ぐうっ！」

清水と呼ばれた彼は一度七雄を睨みつけると、踵を返して奥へと戻っていく。

「あ、待って」

しかし彼女の一言で忠実に足を止めて振り返る。ユカリはつま先を伸ばして、不意打ちのように彼の頬へとキスをした。

「ありがとう。ちょっと格好良かったよ？」

彼の顔は瞬間湯沸かし器のごとく紅潮する。ユカリは首を傾げて

そんな彼を見上げたまま、「あはっ」と笑みを零して、元の場所へと戻った。そんな彼女の肩越しに、もはや怒りなど消え去ったように、スキップ交じりの足取りで奥へと消えていく清水を眺めながら、「主任って本当に清水と付き合ってたんですよねえ」と感慨深そうに呟く。

「そうだよ。えへへ。オフィスラブ、だねえ」

照れくさそうに微笑むユカリと、そして部屋の奥とを何度も視線を往復させる。

「チャレンジャーだなあ……あいつ」

「あはっ。どういう意味かな？」

「いや別に」

「そういえば、君達って同期だったけ？」

「そうですよ。仲良いでしょ？」

「君って本当ポジティブね。ふふ。そういうところ嫌いじゃないよ。

で？ 何の用？」

「ちよっと便利道具をねだりに来ました」

「またか？ この前菖蒲の花を渡したばかりだろう？」

三人分のお茶を淹れた清水がそれぞれの前に湯のみを置きながら釘を刺すようにそう言った。

「お、サンキュ。ていうかお前凄いな。主任と付き合うとか」

「ふん。まあな」

誇らしげに鼻を鳴らす彼に、「いや、そういう意味じゃないんだけどよ……」と呟く。

「とにかくお前のような奴においてそれと魔術道具を貸すわけにはいかん。この前の菖蒲だって副作用が出ることもあるんだからな」

「あれ？ そうだったけ？」

お茶を啜りながらユカリが丸い瞳をさらに丸くする。

「ええ。短期間で多用すると、菖蒲が無くなっても同じ効果が偶発的に起こるといふ副作用が報告されています」

「げ。マジで？ それって治るのか？」

「どうだろうな。まだそれほど報告数は多くない。頻度や条件なども不明だ」

その言葉に七雄を頬を搔いた。

「……まあいつか」

「それで？　今回は何をねだりしにきたのかしら？」

「ああそうそう。空間転移の道具って無いです？」

「あるよ」

「じゃあ貸してください」

「駄目」

「何ですか？」

「貴様のような奴が悪用すると困るからだ」

清水が代わりに答える。

「まあ、そういうことだね」

後を追うようにユカリが微笑んだ。

「そんな事しませんって」

「信用できるか」

はっきりとそう言い捨てる清水とは違い、ユカリは顎に指を添えて天井を見上げる。

「ねえ清水君。アレの試用実験やつてもらおつか？」

「あのチヨークのですか？」

「そうそう。丁度良いじゃない。七雄君、魔術の腕はピカイチなんだし」

「まあ、主任がそう言うのなら」

ユカリは席を立つと、「ごそごそと棚を漁りだす。その背中を眺めながら、「なにになに？ 試供品？」と清水に問い掛ける。清水は渋々と言った様子で口を開く。

「ああ。まだ試作段階でな。丁度他の魔術師の試用レポートが欲しいところだった。貴様も知っている通り、物体転送は本来大掛かりな魔術だ。時間は数日を要する上に、尋常ではない多大な魔力を消費する。しかし主任が開発したチヨークで魔方陣を描けば、簡易的な物体転送が可能となる」

「簡易的？」

「見ただのチヨークにしか見えない白い棒を七雄に手渡すと、ユカリが説明を引き継ぐ。」

「転送できる距離と物体の質量がかなり限定されちゃうの」

「どれくらいですか？」

「使う人の魔術の素養に大きく影響するわ」

「俺だったらどれくらいすすかね？」

「七雄君なら、距離は百km。質量なら……乗用車一台、ってところかしら？」

ユカリのその推測に、清水は微かに唇を噛んだ。

「全然余裕です。じゃあ、借りますね」

そう言って立ち上がる七雄に、「うん。報告書よろしくね」とユカリも立ち上がる。

「お、見送ってくれるんですか？」

「まあ一応お客様だしね。清水君、悪いけど湯呑みのお片づけ頼める？」

あからさまに七雄を睨みながらも清水は「はい」と答える。

「ありがとう。ごめんね」

まだ椅子に腰かけたままの清水の頬に、そっと口付けをする。清

水はその端正な顔立ちをにへらを一瞬崩すと、咳払いをして湯呑みに乗せたお盆を流し場へと運んだ。その背後で、「あんま見せ付けないで下さいよ」という七雄の声が聞こえた。幼少の頃から魔術の腕で劣等感を植え付けられた相手に対して優越感を抱く。しかし、先程のユカリの言葉を思い出すと、舌打ちをして顔をしかめた。

（距離百kmに質量車一台分だと……？　俺は1kmにピンポン玉が精一杯だったのに……くそっ！）

清水が洗い場で七雄に対抗心を燃やしている間、部屋の扉の外で二人が向かい合って別れの挨拶を交わす。

「それじゃ」

「うん」

薄暗い廊下には人氣が一切見られない。長身の七雄が腰を曲げると、小柄なユカリはそれを受け入れるように、つま先をぴんと立たせて、顎を上に向ける。ちゅ、と可愛く音を立てて二人の唇が重なった。

「あはっ。駄目だよ。清水君、いるんだから」

七雄はその言葉を受け流し、再度顔を近づける。

「もう」

呆れるように微笑みながらの、彼女も再びつま先を伸ばす。彼の両手はユカリの肩に乗せられ、彼女の両手は、白衣のポケットに入ったまま。二人の口元からは、くちゅ、くちゅ、と微かに水音が漏れる。やがてお互いの唇が離れると、ぷはあ、とユカリの口から可愛く息継ぎの声が出る。

「相変わらず、上手だね」

「あいつよりも？」

「清水君とはまだほっぺにしかキスしてないよ」

「マジっすか？ 付き合ってどれくらいなんでしたっけ？」

ユカリは首を傾げる。

「今日で丁度一年、かな？」

ああまたか。と七雄は心の中で清水に同情する。

「じゃあ溜まってんじゃないですか？ これから俺とどうですか？」

「あはっ。だーめ。今日これから、清水君と映画観に行くんだから」

微笑み彼を見上げながらその片手をポケットから出して股間を撫でる。

「相変わらず素敵なおちんちんだね？」

「清水のはどうなんですか？」

「んゝ、ちよつとちっちゃいかな。早いし」

（ほっぺにキスだけじゃなかったのかよ。ああそうか。またどうせ、暴発寸前までお預けさせた拳句、目の前でオナニーさせてんだろくな。こんな女と付き合う奴の気が知れんわマジで。でも今の俺的に、見た目はチエちゃんやんと双壁を為す二トップなんだよなあ……。まあいつもドMっぽいから相性良いんだろうけど。ああ……。やりてー）

七雄の視線から情欲を感じ取ったユカリは少し目を細めた。

「あはっ。駄目だつてば。今日は付き合って一年記念デートなの」

「じゃあ、また今度。ね？」

「えゝ、どうしよっかなあ」

そう言いながらも、二人はお互い顔を寄せるように努力をして唇を重ねる。今度はユカリから七雄の口へと唾液を舌で渡した。携帯

が鳴る。舌を絡めたまま七雄がポケットから携帯を取り出し着信先を確認すると、やはり舌を絡めたままそつとポケットに戻す。

「ひいの？」とユカリがキスしながら問うが、七雄は返事代わりと言わんばかりに舌の攻勢を強めた。

ユカリがちらりと見た携帯の画面には『便器その七十三』と表示されていた。ちなみに自分の番号は、『厳選！ お気に入りその四』として登録されているのを知っている。とはいえ特に優越感を抱くこともない。ただただその妙連な舌技を楽しむように、恋人と壁一枚を挟んで七雄と唇を重ねる。

「何よあいつ……」

そつと携帯を閉じた。

（何かあったらすぐ電話しろって言ったのに。全然出ないじゃん）
とはいえ大した用事でも無いので、彼女は気にせず足を進めた。

昨夜七雄が部屋に来た際に彼が落としていったであろうピアスを片手に唇を尖らす。それをポケットに仕舞うと歩幅をより広く取った。

サトシの病室にはそれからすぐに到着した。

扉の前でノックしようとする手が一瞬躊躇で止まった。ここ最近いつもそうなる。楽しみで仕方ないはずのサトシとの時間。なのに彼の顔を見ようとすると胸がズキズキと疼きだす。それは片思いのころの淡いときめきとは違い、冷たい汗が全身を覆う動悸に近い。

それでも意を決してノックをして部屋に入り、彼の顔を視界に入れて彼の声を受け取ると、不思議なくらい全身の不快感が消える。

とはいえ罪悪感に苛まれる肩の重さは消えない。それで良いと思う。この痛みは必要なものだと自分に言い聞かせる。罪を感じながらも彼を守ることが、今のあたしに出来る全てだろうから。

「そういやさ、隣県に新しい屋内プール出来たんだってな」

「へー」

「俺が退院したらさ、行かないか？」

「……えっち」

「ば、馬鹿、違ーよ」

「あはは。焦ってる」

からかうように笑った。あたしが心から笑えるのは、サトシと居る時だけだ。そうか。プールか。サトシと行ったことない。行ったらきつと楽しいだろうな。そういえば、水着もしばらく買ってないや。多分前のは着れない。ブラはもう今までのDカップのじゃ完全にきついし。明日、水着も一緒に買ってもらおうかな。財布居るし。そうだよ。あいつなんて、ただの財布だし。

サトシはどんな水着や下着が好きなんだろうか。知りたい。でも聞くの恥ずかしい。

「うん。退院したら、行こう？」

「ああ」

落ち着いた様子で取り繕うも、心の中では両手を万歳して飛び跳ねる。初デートの約束。つつい勝負手に頬が緩む。

病室の扉が開くと同時に「こんにちはです」と元気な声が聞こえた。その声の主は、あたし達を一瞥すると、「あ、すいません……」と顔を引っ込めて帰ろうとする。あたしとサトシは顔を見合わせて苦笑いを浮かべた。

「ちよつとトイレついでに呼び止めに行ってくるね？」

「ああ」

すぐに廊下に出てその愛らしい少女の背中に声を掛ける。

「いやいやチエちゃん。帰らなくていいから」

彼女はびくりと肩を震わせてゆっくり振り返ると、恥ずかしそうに指をもじもじと絡め、上目遣いで申し訳無さそうに口を開く。

「え？ ああ、でも、お邪魔かなあ、と」

思わずのけぞるほどに可愛い。同性のあたしでもつい頭を撫でてやりたくなる。

「良いつてばもう」

ここでサトシと初エッチをしたのが筒抜けになって以来、チエちゃんは過剰なまでにあたし達に気を使おうとする。確かに二人きりのが良いけど、あいつとは違ってチエちゃんなら大歓迎だ。それに、ちよつと協力してほしい。

「あのさ……」

あたしはチエちゃんに耳打ちする。それを聞いた彼女は呆れるよ

うに笑った。

「なんか、デジャブなんですけど」

チエちゃんだけが戻ってくる。言っただ通り、アカリはそのままトイレに行ったんだろう。なんか今日はやたらと腰をモジモジしてたから余程我慢してたのかな。

「なんか、申し訳ないです」

「馬鹿。気にすんなって」

「そういうわけにも……」

チエちゃんは気まずそうに口元を緩ませながら椅子に座る。

「あ、そういうえば、お二人でプールにデートとか」

「おお。まああれだ。恋人同士の嗜みってやつだな」

「アカリ先輩、スタイル良いから水着似合いそうっすね」

「ま、まあな」

そんな事を言われると、月明かりの下で見たアカリの身体を思い出してしまう。ごくりと生唾を飲み込む。アカリ、かなり着痩せす

るんだよな……。ひき締めまりつつも、グラマーというか。

「どんな水着似合うと思います？」

「え？ ああ、そうだなあ……。」

「まあどんなのでも、似合うでしょうけど」

そうだろうな。身内鼻肩じゃなく、アカリならどんな水着や服でも似合うだろう。

正直ビキニとか見てみたい。特に黒とか絶対似合う。膨張色だから太く見えて女の子は嫌がるって聞くけど、アカリならその心配は無い。むしろ健康的なグラマラスさをより強調するだろう。でもやっぱり、あんまり露出が高いのは嫌だなあ。どうもあの夢を見るようになってから嫉妬深くなってる。アカリの完璧と違って良い肢体を他の男に見せびらかしたい。自慢したいという気持ちもあるけれど、でも、やっぱりな。

「可愛いワンピースとかかな」

俺はそう答えた。

数時間後、チエが帰るとサトシとアカリは再び二人きりになる。

直後にチエからアカリの携帯にメール。

『可愛いワンピースが良いらしいっす！頑張ってください！あと下着までは聞けませんでした。流石に話の取っ掛かりが……』

その文面を見ると小さくガッツポーズをする。

『グッジョブ。ありがとうチエちゃん！』

下着の好みまで聞き出させるのは流石に無茶振りが過ぎたか、と彼女は反省した。しかしたかが水着の好みくらい直接聞けないものかと彼女は不思議に思った。ベッドの上で七雄や六郎に乱れさせられている時はいくでも大胆になれるもの（とはいえ、後で思い出しては枕に顔を埋めて手足をばたばたと暴れさすのだが）、サトシの前だと純情で奥手な少女そのものだった。

再び二人つきりとなった病室で取りとめの無い話を続ける。時折話題が無くなると静寂が病室を包むが、それでも微かな退屈感すら漂わせない。ただ二人で居る。それだけで、二人は幸せだった。

何度も彼女を悩ませた言葉。愛情と肉欲は別。その意味がここ最

近、まさに身に染みるように理解してしまった。自分の身体は確かにセックスの、男の、七雄の味を覚えてしまった。そしてのっぴきならない事情があるとはいえ、同様の快感を与えてくれないサトシに失望を覚えてしまっている。しかしサトシへの想いは何も一片たりとも変わらないのだ。

彼女が幼少のころから描く二人の未来に何も変わりはない。ずっと、二人で一緒にいたい。それだけ。

「あゝあ」

サトシが大きく欠伸をする。

「何？ 寝不足？」

「……ああ」

最近、変な夢で起きることが多い。そう口に出そうとしたが、直前で止めた。

「昼寝したら？」

「いやいい……折角、お前が来てくれてんだし」

その言葉にアカリは胸を締め付けられる。思わず「結婚して！」

と何の脈絡もなく求婚してしまいそんなほど甘酸っぱい気持ちに包まれた。

「馬鹿……ちゃんと起きるまで居るから。ほら」

そう言うのとサトシの片手を握る。セックスしたくなるのを防ぐために軽度のスキンシップも抑えていたが、こんな時くらいは良いだろうと自分を許す。彼女とてサトシの手を握りたいし、キスだってしたいのだ。

「マジで？ サンキュな」

彼女の手の暖かさと柔らかさに安心したように、サトシの瞼がとろんと落ちていく。

「でも、いつでも帰って良いからな？」

「わかってるってば」

そんな言葉を交わすと、サトシの意識が朦朧と閉じていく。

「トイレもいつでも行けよ」

今日はなんかずっとモジモジしてんじゃねーか。そう言い切ることもなく、彼の意識は完全に夢の中へと沈んでいく。

これはサトシの夢の中。

愛する彼女に手を握られ、穏やかに眠るサトシが見る夢。

「あっ……あっ……あっ……あっ……はっ……そこ、いいかも……ああん、
やっ、はあ……」

横向きに寝るアカリの片足を持ち上げながら、七雄は側位でゆっ
くりと腰を振る。

「これ、当たる……いつもと違うところ、擦られるの……すぐに、
変になりそう」

とろんとした顔つきで七雄を見上げると、

「タクヤ……気持ち良いよ……」

とやはり甘い声で報告する。部屋の窓からは、うっすらと明星の
光が差し込む。サトシは驚いた。

（アカリの部屋だ……。アカリの部屋で、アカリが七雄さんとセッ
クスしてる。しかもこれ、夜明け？ 泊まり？）

「んっ！ あっ、あっ、んっ、はあ、はあっ」

二人とも全身汗だくで何度も何度も愛し合ったことを証明するように、丸まったティッシュがベッドの脇に散乱している。

アカリは寝息を立てるサトシの寝顔を穏やかに眺める。両手で包み込むようにサトシの手を握った。

「あたし、頑張るからね」

そう宣言するように呟く。そして周りの気配を一通り確認すると、そつと唇を寄せていった。一度だけ、起こさないようにキスをする。

「ん……」

思わず声が漏れる。触れるかどうかくらいのキス。いつもしているキスと比べると、子供の悪戯のようなキス。しかしそれでも身もだえするほどに愛おしい。別にセックスが下手でも良い。気持ち良くななくても良い。これからもただずっと一緒に居たい。アカリは両手でぎゅっと恋人の手を握りながら、心の中でそう呟いた。

「バックでしようぜ」

そう言って一旦離れる七雄の指示通り、アカリはふらふらと肘で上体を支え臀部を突き出した。アカリの腰は何度もその雄々しい陰茎に貫かれたことを主張するように、もうがくがくに震えている。

七雄はすぐに挿入せずに、まずは自分を求めるかの如く突き出された腰に顔を近づけると、当然のようにアカリの皺一つない肛門を舐めだし、そして指を突っ込む。もうこの晩も何度も何度もそうされてきたのだろう。

ほぐされきったアカリの肛門はいとも簡単に彼の指で広げさせられた。両手の指で、左右から、くばあ、と音を鳴らすかのようにアカリの肛門が広げられる。ピンク色の腸壁がサトシの意識に鮮やかに映った。

（そんな……開くものなのか？　そこ）

七雄は自身の陰茎を手にとり挿入の態勢に入る。しかし、その大きな亀頭があてがわれるのは、性器ではなく、すっかり柔くほぐされた排泄器官。

「アカリ。いいか？」

アカリは……こくりと、頷いた。

（嘘だ……）

「ゆっくりするからな？」

またこくりと頷く。

（嘘だ嘘だ嘘だ！）

「痛かったら言えよ？」

「……うん」

ただでさえ大きな亀頭がその初々しい肉穴を犯せる興奮からさらにパンパンに張り詰める。ビキビキと青筋を立ててさらに天を突くように反り返った。そんな凶暴なフォルムがお尻の穴に収まるわけがない。

「アカリの初めて……俺にもくれよ」

やめてくれ！

サトシは叫ぶ。しかしその悲痛な声は、二人には届かない。それは、もう既に、起こったことなのだ。

「……ん」

アカリのその囁きは、ただの吐息なのか、はたまた七雄に対する許可なのかの判別はつかなかった。ただ一つ確実なのは、四つん這いで彼を求めていることだけ。

とろりとカウパー分泌液が浮かぶ鈴口が、ひくひくと物欲しそうに蠢く肛門の中心に添えられる。七雄の口元が愉快気にやりと歪むと、アカリには聞こえない微かに眩きを発した。

「いったただつきまーす」

そんな声がサトシにははっきり聞こえた。

「アカリ……」

そんな寝言にアカリはどきりを鼓動を弾ませる。更にはサトシの閉じられた瞼から涙が零れた。

どんな夢を見ているのだろう。

アカリは起こすべきかどうかを悩んだが、とりあえずその涙を指で拭うともう一度優しくキスをした。

「大丈夫だよ？ あたし、ここに居るよ？」

辛そうに自分の名を呼んだ恋人にそう優しく語りかける。寝ながらとはいえ目の前で恋人が涙を流す姿に、かつてないほど彼女の母性が刺激される。彼の手を包み込むように握る両手はさらに熱が籠る。

「あたしが絶対守ってあげるから」

ゆっくりと、しかし確実に、その猛々しい肉棒は彼女の肛門へと埋没していく。本来ならばそのような熱く、硬く、太い肉塊を受け入れることなど微塵も想定されていない器官にも関わらず、じつくりと時間をかけてほぐされたアカリの肉穴は、ぐにゆう、と音を立てるかのように、七雄の亀頭を飲み込みながら形を変える。

繁殖の為ではなく、性感帯が存在するわけでもない。ただただ男側の肉欲と支配欲を満たすための行為。女性側からしたら、自分を悦ばしてくれる雄へ対しての、身体を使った最大級の奉仕活動。

目の前の肉がカリまで飲み込むと七雄は舌なめずりして、「いいねえ……ただの便器でも一番乗りの感触ってやつは」と囁いた。

「はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……」

アカリは浅く断続的に息を吐き続ける。まるで出産時の妊婦のよう。両手はぎゅっとシーツを握り締め、顔は苦痛に歪みながらも、しかしある種の覚悟が伴ったオンナの顔をしている。

「痛いかな？」

肩で息をしながらどうかと言った様子で首を横に振る。

「もう少しだけ、アカリの中に入るな？」

やはり切羽詰った様子で首を縦にこくこくと振る。

「もつと深く、繋がるうな？」

「……う、うん……」

その返答を確認すると七雄は、ぐぐぐ、と腰をさらに前に突き出した。

「はあっ！ ひっ、はっ、ひっ、はっ、ひっ、ひっ」

シーツを歯で食いしばりながらその感触に耐える。呼吸はさらに荒く、そしていよいよ余裕の欠片も無くなる。自分を隅々まで犯すつくす雄に屈服する雌の鳴き声。

陰莖が肛門に埋没したのは半分過ぎといったところだろうか。

「ああやべ。マジ食い千切られそう」

薄ら笑いを浮かべてそう呟く。

「ひっ、ひい……いっ、あっ……はっ……はっ……はっ」

依然切迫した様子で浅い呼吸を続けるアカリに問い掛ける。

「良かったん？ 俺が処女貰って？」

彼女は「んぐ」と無理矢理呼吸を整えるように息を飲み込むと、

「………彼氏だから」とか細かい声で答える。

「は？」

聞こえてたはずなのに、聞き返す。彼女はもう一度息を飲み込むと、

「……一番の、彼氏、だから……いい」と先程よりはやや大きな声で返す。

彼氏の要望に応えようとする、とても健気な姿だった。

「じゃあ二番目の彼氏に謝ろっか？」

排泄器官を男の性器で満たされて、そして自身の性器からは何度

注ぎ込まれたのかわからないほどの精液を垂らしながら、今この瞬間だけはこの雄に支配されているんだ、と理屈でなく、身体で納得した。自分を悦ばしてくれる雄に支配される幸せを、まだなんとか数え切れるほどの回数ではあるが、七雄との性行為で身体に刻み込まれていた。

「サトシ……ごめんなさい……ベッドの上では……こいつが……一番の彼氏だから……」

（……二番目なのか？ 俺は二番目なのか？）

性行為中だけ、一番の彼氏になるという二人の取り決めにサトシは知らない。知っていたところで、彼の絶望になんら変わりはないだろうが。

「初めての記念にさ、このまま出して良い？」

アカリは答えることが出来ない。いつの間にか彼女は顔をシーツに押し付けむせび泣いていた。

「良いよな？ ほら、どうせもう五回目だし。あんま出ないしさ」
アカリは嗚咽を漏らしながら謝罪の言葉を繰り返すだけである。

何一つ初めてを捧げることが出来なくてごめんなさい。言葉にならなくても心の中で何度も繰り返して謝る。

七雄はそんな彼女の腰を両手でしっかりと掴み、「ま、梅と竹の間かな」と呟くと、一気に奥まで貫き射精した。アカリの直腸は彼の長い陰茎を一気に受け入れ、そして隙間無く満たされる。その上で打ちつけられるように精子を注がれた。

「ひい、いつ、ひっ、ひうっ！ ……あっ、あっ、あっ……んっ、はあ、ああ」

涙を流し続ける彼女は声にならない声を漏らし続けた。七雄は射精を続けながら片手でポニーテールを力一杯引っ張り上げた。くしやくしやくに泣きじゃくるアカリの顔が、サトシの意識のまん前に釣り上げられた。その背後ににやにやと笑う七雄の顔。その口元は、「ああ、良いわ…このオナホ」と、やはりアカリには聞こえないよう囁いていた。

七雄が彼女を手放すと、ずるりと肛門から陰茎が抜けていく。改めてその雄々しさにサトシは驚愕する。

（こんなものが……アカリのお尻の中に？ 冗談だろ？）

彼女は事切れるように上体を突っ伏し、そのまま気を失うように意識を朦朧とさせた。

引き抜いた自分の陰茎を見ると、七雄は感心するように、「お、浣腸してなくても綺麗だな」と口にした。

窓からは日の出の陽光がそんなアカリの背中を照らす。形良く、ぷりんと肉が盛られた臀部。その中央に位置する穴は、先程まで埋まっていた肉棒の形を維持するように、ぱっくりと口を開いていた。そしてそこから漏れる、白い粘液。

アカリの意識が朦朧としているのを確認すると、七雄は携帯を取り出し、その箇所を何度も接写する。動画も撮っているようだ。そして服を着ると、「泊まりは駄目なんだよな？ 流石に俺もしんどいし帰るわ」とアカリに声を掛ける。部屋を出る時、「あゝ、しかし、便所としては最っ高だなこのガキ」と笑っていた。



目を覚ましたサトシはあまりの息苦しさにむせそうになった。動悸も激しい。

目の前には心配そうに、自分の手を両手で握り締めてくれているアカリ。目尻に涙が流れていたような感覚。しかし手を伸ばすと既に乾いたのか何も無い。

「大丈夫？」

首を傾げながらそう尋ねるアカリの目にも薄っすらと涙が溜まっていた。サトシは上体を起こしアカリに抱きついた。アカリはそれを受け入れ、彼の背中と頭を慈愛に満ちた手つきで撫でる。

「大丈夫だからね？」

事故のフラッシュバックの夢でも見たのだろうか？ アカリはそう心配しながら、サトシを優しく抱きしめる。

「アカリ……」

「……ん？」

「俺のこと、好きか」

「……うん」

「一番か？」

「……当たり前じゃん」

「ずっと、一緒に居てくれるか」

「……うん」

「……愛してる」

「あたしも愛してるよ」

アカリはサトシに対してはすんなりとその言葉を口に出ることが出来た。それは当然の事。ただの本音をそのまま口にするだけなのだから。自分を誤魔化す演技など必要無いのだから。

伝え合う彼らの愛の言葉に一切の偽りは無い。

しかし抱きしめられながらも、もしもじと腰を揺するアカリの肛門はひりひりと熱く疼いた。昨晩貰いた別の男の刻印の余韻がまだ鮮明に残っている。長い陰茎で奥に放出された精液が、直腸の中でぬるぬると軟膏を塗られたように気持ち悪い。

「愛してる」

何度目だろうか。

サトシのその言葉に反応するように、ついにはどろりと精子の塊が肛門から垂れ落ち下着を濡らしたのを感じた。その感触に一瞬喉を詰まらすが、アカリはぐっと下唇を噛み「……うん。愛してる」と力強く返した。

窓からは夕日がそんな二人を見守るように照らしていた。

同時刻。ルリが入院しているN病院。七雄はスキップ交じりの足取りでルリの病室に向かう。

そしてその部屋の前には見覚えのある顔。とはいっても顔見知りではない。資料で見たことがあるだけ。

遠藤カズキ。ルリの彼氏である。廊下に設置されたソファに腰掛けて、文庫本を読みふけているようだった。しかし腕時計を確認すると溜息をついて腰を上げる。その時、七雄と目があつた。

「あの、もしかしてルリ……ちゃんの知り合いですか？」

我ながら白々しい演技だ、と七雄は笑いを堪えるのに必死だった。

「は、はあ……えっ、っと……あなたは？」

眼鏡をかけた如何にも普遍的な大学生といった風貌のカズキは、訝しむように七雄を見た。

「いや、あの、俺、前にバイトで知り合った七雄っていうんですけど……」

「ああ、そうなんですか……あの、俺……」

「もしかして彼氏のカズキ君ですか？」

「は、はあ。まあ、そうです」

「ルリちゃん、いつも彼氏の話ばかりしてましたよ」

「そう、なんですか？」

「ええ。ぶつちやけあの子すごいモテるでしょ？ でも言い寄ってくる男なんて全然興味無い感じなんすもん」

そう言われて、カズキは少し照れくさそうにはにかんだ。

勿論バイトの同僚というのは七雄の嘘だが、実際ルリがカズキ以外の男に対して淡泊な態度を取っていたのは事実ではある。

「実は、俺も振られちゃったんすよね。そりやもうにべもなく」

七雄は肩を竦めながらそう言う。

「え？」

「全然相手にされませんでしたよ。羨ましいです。あんな子、彼女に出来て」

「あ、はあ」

何だこの人、とカズキは面を食らったが、不思議と悪い気はしない。何より、明らかに自分より容姿が優れる男から、そう言われると、自尊心がくすぐられる。ル

リがそんな男に、これっぽっちも靡くことはなかったという事実も嬉しい。

「それで、まあ元同僚で振られた男のよしみってやつでお見舞いに来たんですけど……」

「ああ、でも、面会謝絶なんですよ」

「そうですか……あの、毎日来てるんですか？」

「はい。きつと、その内目を覚ますでしょうか」

そう口にするカズキの目には、多少の疲れや不安が溜まっていたが、それでも前を見据える意志の強さを感じた。七雄は感心するように、「ええ、きつと大丈夫ですよ！」と握り拳を作った。

その後、病院を後にするカズキの背中に両手を合わせると、

「わりっ！ 今日だけ貸して！」と頭を下げた。

「まあいいじゃん。これからはずっと一緒なんだし。ていうか、あれだけの女独り占めはするいぞカズキ君」

病室に入ると、ルリがベッドに寝ている。点滴だけが繋がれており、本当にただ眠っているようにしか見えない。血色も良いし、寝息も健やかだ。彼女の身体の近

くでくんくんと鼻を鳴らす。

「うん。ちゃんと清潔にしてもらってるみたいだな」

そう言うのと、「じゃ、六郎先輩、ちょっと借りますね？」と誰も居ないはずの背後を振り返る。その声に呼応して風景が捻じ曲がると同時に六郎が出現した。

「勝手な事をしてもらっては困るのだが」

「まあまあ。すぐに返しますから。あ、これ新しい魔術品の試験も兼ねてますから。別に私用目的とかじゃないんであしからず」

そう言いながら、チヨークで床に魔方陣を描くと、ルリから点滴を離し、身体を魔方陣の中心に置く。すぐに魔術は発動した。ルリの身体が、光を帯びながら消える。

それを見届けると、「じゃ、俺マンションに居るんで。ルリは数時間で返せると思うんで、その間適当に誤魔化しとして下さい。まあ最悪、ここウチの系列の資本だから大丈夫ですけど」と六郎に片手を上げる。

「今後は、こいついった事は遠慮願いたいものだな。『七雄魔術師殿』私達代理人は、たとえどんな規約違反でも、人間の魔術師に逆らうことが出来ないのだから」

「やだなあ先輩。元、ですって。今はただの代理人。同僚。仕事でハマして、呪い

を掛けられて、種無しにされた哀れな代理人ですよ。ホームクルスと一緒ですって」

「条件つき、だろ？」

「お、流石事情通。六郎先輩も、結構裏ありそうですね？　そういえば、前から不思議だったんですよ。人間をベースにした混合のホームクルスは数多く精製されてますけど、なんで純正ホームクルスって、六郎先輩だけなんですかね？　それこそ、紺野主任が挑戦しても失敗するような代物……一体、誰に作られたんですかねえ？　先輩？」

六郎は答えない。表情も変えない。

「ていうか、一体『いつ』から居るんだ？　あんた？」

笑みを浮かべながらも、七雄の眼光が鋭く光る。六郎はやはり何の感情も見せず、淡々と口を開いた。

「私はただのホームクルスだ。君達人間に逆らう事など出来ない。ただ一つ、願いがあるとするならば、アカリを傷つけないでやってくれ」

七雄は呆気を取られる。棘を抜かれたように表情を穏やかにする。

「わかってますって先輩。きちんと気持ち良くくしてあげてますって。じゃ、ルリちゃんちよっと借りるんで」

手をヒラヒラさせながら出て行く七雄を、六郎は無表情で見送った。

マンシヨンに帰ると、予め書いてあった魔法陣に、無事ルリが転移されていたことを確認する。もう先程の六郎先輩とのやり取りなど頭から消えている。俺にとつては、先輩の正体などどうでも良い事なのだ。自分の仕事は真面目にやる。それだけ。そして、息抜きも真剣にやる。可愛い後輩の筆卸しも全力。早速ユーキにメール。

『セフレ紹介するから来ない？ 3Pしようぜ』

即返信。

『マジすか？ 良いんすか？ 今すぐ行きます』

さて、3Pは無理だな。ルリは寝ちゃってるし。そうだ。酔いつぶれた、って事にしておこう。でも初めてが睡眠姦つても味気無いよな。そもそも濡れないだろうし。

ふむ。ここは美学に反するが、あれを使おうか。まあ、俺が相手するわけじゃないし、美学的にもギリセーフっしょ。

ルリを裸にしてベッドに寝かす。そしてその胸に手をかざすと魔術を詠唱する。

すぐにルリの肌が汗ばんでくる。そして悩ましげに身体をくねらせ始めた。まるで熱帯夜に寝苦しんでいるような挙動。さぞかしエロい夢を見てるんだろうな。股を開くと既にぐっしりと濡れていた。よし、と俺はガッツポーズをした。

このルリは植物状態というよりは、完全にただ寝ているだけなのだ。なので淫夢と催眠の魔術を掛けてみたらこれが大成功。

ユーキ早く来ないかな。

カズキは先程会った七雄という青年を思い出す。ルリは色々な人に心配されてるんだな、と思うと胸が熱くなった。

病室の扉に目を向けると早く目を覚ませよと静かに呟いた。

リノリウムの床が続く廊下には彼だけが一人佇んでいる。じつと恋人を廊下から見守る彼の姿だけが物淋しく照明が照らしていた。

「大丈夫ですか？ これ、本当に目覚まさないんですか？」

「絶対大丈夫。保障する。そいつ酔いつぶれたら絶対目え覚まさないし」

いや知らないけど。ルリに酒飲ませたことないし。しかしユーキ君。童貞とはい

え中々やるねえ。良いピストンだ。それ本当に酔いつぶれてるだけだったら、絶対目え覚ましてたぞ。流石バスケット部エース。身体能力とリズム感が良いね。ぎったんばったんベッドが揺れる度に、ルリの巨乳がぶるんぶるんと暴れてる。

「すげえっ！ まんこ、すげえ気持ち良いっす！」

ルリも相当エロい夢見てるみたいだし、ユーキのちんこ気に入ったみたいで、寝ながらかなり濡れてる。ぐっちょぐっちょと音がやらしー。

「あっ……ああっ……んっ……はぁ」

甘い吐息まで漏れ出す始末。しかしユーキのちんこ、太いな。長さはそうでもない。カリもそこまで。でもとにかく太い。しっかりルリのまんこはそれが気に入ったみたいで、寝ながら思いつき感じはじめちゃってる。

「あっ、あっ、あっ……せ、先生……」

先生？ ああ、山本か。ちんこの形が似てるのかな？ ルリのまんこにちんこを憶えさせるとは山本恐るべし。ていうかここは、彼氏の名前呼んでやれよ。まあ、仕方ないか。ルリ、多分完全に魔法少女症候群にハマってそうだから。彼氏とめっちゃ我慢しながら何回もしまくってたしな。魔法少女辞めた後大変だぞお。まあ俺が慰めてやるけどな。飽きるまでは、だけど。

「なあ？ ルリまん良いだろ？」

「はい、なんか、押し返されそうなほどぶにぶにです」

「はっ、はあっ、んっ、んっ、あっ、あっ」

「ほら、ルリっぱいも最高だからもつと揉めって」

「これやべーっす、柔らかかすぎでしょこれ」

乱暴に揉まれ、ぐにぐにとユーキの指を飲み込むよう柔らかく形を変える。

「血管浮くほど白いし、乳首薄いピンクだし……超美人だし……マジ天使ですねル

リちゃん」

「おお、ガンガン犯してやれ」

「はいっ！」

良いねえその乱暴な動き。

「あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！」

おお、寝ながら超よがってるよ。うける。

「あんっ！ あんっ！ あんっ！ ……………ああああんっ！」

しかも寝ながらイった。これは新発見。男でいう夢精みたいなもんか。いや、寝ながら無理矢理射精させられた、って感じなのかな。ユーキが辛そうに顔をしかめ

ている。

「ううう。なんか、ルリちゃんのまんこ、すげえ締め付けて……」

ああそうか。わかんないか。

「それはな、イカしたんだよ。お前が、ルリを。やったな。凄いじゃん。初めてでさ」

そう言って、ユーキの背中を叩く。多分、ていうか絶対、彼氏ではいった事ないんだろうな。いったら彼氏下手すると死んでるし。

よほど締め付けが苦しかったのか、ユーキはその太チンを一度取り出す。薄黒いゴムは真っ白になっていた。本当は生でやらせてあげたかったけど、今はピル飲んでないし、ユーキだと普通に妊娠しちゃうしな。それは流石にルリも可哀想だ。だから別の道を模索する。

「なあ。生でやってみねえ？」

「え？ いいんすか？」

「ああ。折角の初めてなんだし、中出し決めたいだろ？」

まだビクビクと痙攣しているルリをひっくり返して腰だけ浮かせる。そしてそのアナルを左右から広げた。

「こつちなら生で中出しし放題だ。さあばつちこい」

「ま、マジ、っすか？」

ユーキはごくりと喉を鳴らすと、ゴムを外す。

う、やっぱり太いな……流石にきついかな？

お、

おお、

おおお！

すげえ、入った！

流石俺が手塩に育てたアナル。ちよつと、みちみち、って音がしてたのが気になるが。ユーキはむしろ辛そうな顔してる。

「ち、ちんこ……千切れそうです」

「大丈夫。すぐにこのケツマンコ、お前のちんこ覚えるから」

ゆっくりと動き出す。抜き挿しする度に、ルリの小さめのアナルが、ぐばあ、とユーキのちんこにくっついていて、ひよつとこ口みたいになる。俺はそれを携帯で写真と動画を撮る。後でアカリのアナル処女と一緒に、ネットに投稿しよう。顔映ってないからいいよな。

「ああっ、すげえ！　すげえっ！」

ユーキがのめりこむようにピストンを始める。あーあー。ルリのアナル、壊れなければいいけど。

「女の身体、マジやばいっすね。超気持ち良いです」

バックからその巨乳を揉みしだきながら必死に腰を振るユーキ。恍惚しきった表情を浮かべている。それを見て人生の先輩として感動する。

「ああっ！　ルリちゃん！　ルリちゃん！　あああああっ！」

はい。無事童貞セックス終了。

ユーキのちんこが抜ける時、ぐっばあって音した。奥まで丸見え。写真撮ったとこ。

「あ、あの、もう一回とか、良いっすか？」

「ああはあ言いながらも、そう頼んでくる。俺は親指を立てた。

「ああ勿論だぜ！　でも先に俺にもやらせてな」

「あ、はい。じゃあ俺、ちよっとトイレ行ってきます」

「おおお」

さて、俺も久しぶりにルリまん堪能するか。おお、やっぱり肉厚でいいねえ。ユーキの太チンの後でも全然押し返してくるわ。

「あつ、あつ、これっ、あつ、ああつ、タクヤっ」

お、感心感心。ちゃんとルリまん、俺のちんこも覚えてたんだな。あれ？ でも俺の名前教えたっけ？ 最後のエッチの時教えたかな？ いつもみたいに、『お前だけに知ってて欲しい』って。まあどうでもいいけど。

「うぐっ、うう、あ……」

いいねえやっぱりこの身体。ん？ 電話？ 『便器その七十三』……誰だっけ？
「もしもし」

ピストンを止めて電話に出る。

「あ、あたしだけど」

ああ、アカリちゃんね。便所としても性能高いから結構好きよ、俺は。ちょっと飽きてきたけど。

「あんた、ピアス落としてったでしょ」

「ああそうだっけ。ごめんごめん。明日渡してよ」

「わかったわよ」

「明日のデート、楽しみだな」

「ば、馬鹿……デートじゃ、ないし」

あ、焦らされてるルリの腰が勝手に動き出してきた。ぺたん、ぺたん、と肉つきの良い尻を押し付けてくる。無意識って怖いねー。でもやっぱ、ルリまん気持ち良いわー。肉でぎゅって押し包まれる感じが心地良い。アカリちゃんのミミズ千匹とどっちが良いかなー。うねうねしてくんだもんねーあの便器。迷うなー。

「じゃ、明日な？」

「え？ あ、うん」

「愛してるよ」

「……あ、そう」

「なんだよお前も言えよ」

「……やだ」

墜ちそうで墜ちないところも評価高し。

「なあ？」

「何よ」

「ルリ、頑張って助けような？」

「言われなくてもそうするわよ」

「ん、じゃな」

「うん」

電話を切る。さて、そろそろ、俺もアナルにぶちこむか。……ん？ ……ん？
ああ……。ごめん、カズキ君。君の彼女のケツ穴、もうガツバガバだわ。はは。

第七話 「ルリとカズキと、時々童貞」おわり

アカリ母

年齢: アカリを産んだのはかなり早いため、まだ三十半ば

性格: 豪放、豪胆、豪快。

細かいことは気にせず、正しいと信じた道ならば
茨の道であろうが断崖絶壁であろうが
平然とした足取りで切り拓く傑物。
そうした振る舞いに見合う知力と精神力を兼ね揃える。
アカリの気性が日本海の荒波が打ち付ける岬ならば、
彼女のそれは広大な大海原そのもの。
娘の教育方針は放任主義。

体型: 身長、アカリよりやや高い
体重、アカリよりやや重い
胸、アカリより結構大きい
腰、アカリよりやや太い
尻、アカリよりかなり大きい

なに？ 私と不倫がしたいだと？
面白い男だ。気に入った。
ウチに来て娘とフアックして良いぞ。

おかーさん、飯炊けたよ！
あ、お客さん？
会社の人？



はっはっは。
もちろん冗談だ。
生憎私も娘も惚れた男がいる。
君にチャンスは無いから諦めてくれ。

体験版はここまで

